

日本遺産認定記念

平成27年度 咸宜園教育研究センター 秋季企画展

# 文人の至宝

～学芸と硯の世界～





## ごあいさつ

今年四月、文化庁が新たに創設した『日本遺産』に「近世日本の教育遺産群―学ぶ心・礼節の本源―」のストーリーが認定を受けました。その中には、本市の「咸宜園跡」や「廣瀬淡窓旧宅及び墓」、 「豆田町重要伝統的建造物群保存地区」などのほか、世界文化遺産の登録に向けて連携する茨城県水戸市の「旧弘道館」や栃木県足利市の「足利学校跡」、岡山県備前市の「旧閑谷学校」などが構成文化財となっています。

今回の企画展は「文人の至宝―学芸と硯の世界―」をテーマとしました。江戸時代後期、豊後日田に開設された私塾「咸宜園」の発掘調査では塾生が使用した文房具、特に「赤間硯」などの石硯が多く出土しています。当時の日本は全国各地で藩校や私塾、寺子屋など多様な教育機関が開かれ、漢学や国学、洋学などの学問だけでなく、筆道や画塾など芸術の分野でも文房具を必要としました。

中国では、古来より文人が使用する文房具の中でも、とりわけ筆・墨・硯・紙の四種を「文房四宝」と称し、大切にしてきました。後には鑑賞用の具としても発展し、日本国内でも文人の間で文房趣味が広がっていきます。今回の展示は、江戸時代を代表する硯のひとつであり、廣瀬家や咸宜園の塾生も愛用した「赤間硯」を中心に、文人たちの文房具を紹介いたします。

末尾となりましたが、本展の開催にあたり、貴重な史資料の御出陳にご協力を賜りました関係者の皆様に感謝の意を表します。

平成二十七年一〇月

咸宜園教育研究センター名誉館長

後 藤 宗 俊

# 企画展の開催にあたって

別府大学教授 荒金大琳

## 「端溪硯と赤間硯の接点を求めて」

「休道他郷多苦辛 同袍有友自相親 柴扉曉出霜如雪 君汲川流我拾薪」

この廣瀬淡窓先生の詩から、塾生が他の地域からもこの日田の咸宜園に集っていたことが解る。又、赤間硯の破片が咸宜園からは出土されており、山口地方出身の塾生によつて赤間硯が持ち込まれたか、誰かの手によつて持ち運ばれたことになる。

古来中国や朝鮮半島から多くの人々がこの日本に、舟か船を用いて日本の各地に渡来している。まだ飛行機も車も、新幹線もない昔のこと。渡来人によつて数多くの文化が持ち込まれていたことは歴史上の事実である。

例えば、秦の時代には徐福が……。時を超え「曲水の宴」や「筆・墨・硯・紙」の文房四宝や「鉄」の製造方法など、多くの文化や知識が日本に伝えてきている。中でも曲水の宴は赤間神宮にて古くから実施され、硯も赤間神宮の付近から採石された朱色の石を用いて赤間硯と称している。赤間硯は一九一一年（建久二年）鎌倉市の鶴岡八幡宮に奉納された記録がある。この硯の真偽については疑問視する声もあるが、硯の箱は当時のものらしい。しかし、延慶本平家物語の第六本には「女院八御焼石ト御硯箱トヲ左右の御袖ニ入サセ給テ、……」とあり、先帝御入水の際に、「御温石と御硯とを左右の御懐におもりのために海へ入らせた……」と明記され、『御硯箱』という記載はある。しかし、硯の種類や産地までは記されていない。

赤間硯の他には次の九つの硯が日本にある。

- (1) 那智黒硯（和歌山）平安時代。色は黒
  - (2) 若田硯（対馬）紫式部が源氏物語揮毫に用いた。色は黒
  - (3) 紫雲石硯（岩手県）平泉・藤原三代の頃から生産。少し赤間硯に似ている
  - (4) 雄勝硯（宮城県石巻市）室町時代
  - (5) 高田硯（岡山）室町時代
  - (6) 土佐硯（土佐）応仁の乱（室町時代一四六七年）
  - (7) 硯（大子硯）（茨城県）水戸藩二代藩主徳川光圀（水戸黄門）の時代
  - (8) 雨畑硯（山梨県南巨摩）永仁五年（一二九七年）に日蓮の弟子・日朗が発見
  - (9) 龍溪硯（長野）江戸時代日本各地の硯の地域や制作年代を比較してみると、赤間硯は源頼朝の鎌倉時代から平安時代までさかのぼり、(1)那智黒硯や(2)若田硯と時代は同じになる。(1)と(2)の硯の色は黒。
- 赤間硯の色は赤味がかかっている。赤味がかかっている中国の硯と言えば硯の最高峰端溪硯となる。端溪硯は現在の広東省にある端溪という川で採掘された石を用いた硯のこと。端溪硯の存在は（注1）唐高祖の武徳年間（六一八年～六二六年）までさかのぼる。平安時代の遣唐使が端溪硯の知識を持ち込んでいたとすれば、色彩の面から見て赤間硯が用いられていたと推測し、『御硯箱』の中の硯は赤間硯だったと想像する。ここで必要になるのが端溪硯と赤間硯の比較である。
- 赤間硯は別に赤間関硯とも呼ばれている。赤間関とは現在の下関のこと。この地

域にも古来朝鮮半島や中国からの渡来人は多く、中国の端溪硯に似た赤間の石を見つけ、赤間硯を端溪硯の代用として用いたと考えても不自然なことではない。端溪硯と赤間硯の比較のために、山口県の下関市立長府博物館・下関市立東行記念館・下関市立考古博物館・毛利博物館の各博物館を訪ね赤間硯を見学した。収納されている硯の色合いは端溪硯に似ていた。その足で、宇部市西万倉の「赤間硯の里（岩滝）」を訪問。赤間硯の原石と完成された硯を鑑賞。端溪硯に似ていたことが印象深い。

赤間神宮は安徳天皇を祀っていること。赤間神宮の敷地内に紅石稻荷神社が建てられていたこと。両者に美しい朱の色が印象的だったこと。神社と朱の色は切り離せないこと。赤間の赤は朱に関連され水銀とも関係していたこと。中国の端溪硯が同色系であったこと。赤間関硯はブランド品として毛利家や中流以上の人たちが用い、一般庶民が用いた赤間硯とは、質や装飾等少し異なっていたこと。赤間硯が採掘された石の層は山口県の宇部地方から九州の門司付近までつながっており、この層の様々な場所が採掘されていたこと。江戸の晩期には寺子屋や塾でこの赤間硯は用いられ、明治の初期から中期になると山口県の厚狭から下関小月に至るまで多くの職人が硯を作り販売していたこと。赤間硯を多くの人々が日常的に使用されていたこと。

使用者の立場から見ると赤間の硯は墨をする際、磨りやすいものと、つるつるして磨りにくいものがある。この解消のために硯の表面に鋒錠を立てる必要が生まれる。赤間硯では赤間の石の採掘場近くから採石された砥石のような「目立て石」を用いていること。以上がこの旅行中、心に残ったことである。

咸宜園のテーブルに話を戻し、咸宜園発掘調査で出土された、割れた赤間硯や傷ついた赤間硯が驚くほどの話題に展開している。この赤間硯を対象に、色々な講師がその専門の立場で公開講座が実施される。一月三日に担当する講座には端溪硯と赤間硯を持参。

直に手で触っていただく時間も確保している。皆様方と一緒に語り合いたいと思います。

是非とも、この研究の輪の中に大分県の人々が、多くの日田の人々が参画し、咸宜園の研究の輪が広がっていくことを願っています。

注1 端溪硯が唐の時代の武徳年間から始まったという記載は、清の計楠（一七六〇～一八三四）の『石隠硯談』に、「東坡曰、端溪石、始于唐武徳之世。（蘇軾が言うには、端溪石は唐の武徳の世から始まる。）」とあり、唐の詩にも端溪の名前は登場していることができる。全書端溪硯譜提要には「考端硯、始見李賀詩。（端溪硯は李賀の詩より見ることができるとある。李賀の詩『楊生青花紫石硯歌』には「端州石工巧如神、踏天磨刀割紫雲、備剗抱水含滿唇、暗灑長弘冷血痕。沙帷畫暖墨花春、輕漚漂沫松麝薰、乾膩薄重立腳勻、數寸秋光無日昏。圓毫促短聲靜新、孔硯寬碩何足雲。」劉禹錫の詩『唐秀才贈紫石硯以詩答之』に「端州石硯人間重、贈我因知正草玄。」皮日體にも「樣如金鑿小能輕、微潤將融紫玉英。」とある。唐の李肇の『國史補』には「内丘白瓷罇、端溪紫石硯、天下無貴賤通用……」とあり、唐の時代すでにたくさんの人が端溪硯を使用している。

二〇一二年には広州の昌崗路で唐代の端硯が発掘され、一二月二四日、羊城晚報に入った報告によると昌崗路の建築現場で唐墓が発見され、端硯などの文物が出土している。

「文人の至宝」学芸と硯の世界」

目次

ごあいさつ	咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊	
企画展の開催にあたって	別府大学教授 荒金 大琳	4
はじめに		
第一章 廣瀨家の至宝		5
廣瀨家の人々		6
廣瀨八賢の硯と文房具		7
廣瀨家と高山彦九郎・釈法蘭		8
第二章 咸宜園との交流		9
菅茶山と廣瀨淡窓・旭荘		10
田能村竹田と廣瀨淡窓・咸宜園		11
咸宜園門下生の文房具		11
第三章 天下一の赤間硯		13
赤間硯とは		14
図解 赤間硯制作工程		18
コラム 吉田松陰の「功臣」赤間硯	松陰神社宝物殿至誠館 上席学芸員 島元 貴	20
第四章 日本遺産「近世日本の教育遺産群―学ぶ心・礼節の本源―」		22
日本遺産とは		23
教育遺産の文房具		24
日本遺産の構成文化財一覧		26
出品資料図版・解説		28
出品資料一覧		47
参考文献		49

凡例

- 一 本書は、平成二十七年一〇月一〇日（土）～一二月三〇日（月）まで咸宜園教育研究センターで開催する秋季企画展「文人の至宝」学芸と硯の世界」の展示解説書です。
- 二 本展の企画及び本書の執筆・編集は主に吉田博嗣が行い、溝田直己が補佐した。また、第三章のコラムは島元貴氏（松陰神社宝物殿至誠館 上席学芸員）に玉稿を賜った。そのほか、第三章の図解は日枝陽一氏（赤間硯作硯家）の監修・協力を得て作成した。
- 三 出品作品の写真等は、資料所蔵者及び関係機関より借用し、その他の写真は雅企画（長谷川正美氏撮影）に委託した。
- 四 出品資料の写真図版は、巻末の出品資料図版・解説にすべて掲載した。また本文中の図版は出品資料の一部であり、展示解説に必要な参考資料として出品資料以外の写真も掲載した。
- 五 左記の各位・機関の協力を得た。記して感謝の意を表します。  
公益財団法人廣瀨資料館（本文中は廣瀨資料館と表記）、公益財団法人毛利報公会・毛利博物館、正楽寺、山口県文書館、山口県埋蔵文化財センター、山口市歴史民俗資料館、鑄銭司郷土館、長府博物館、豊浦小学校、松陰神社、福岡大学、太田市教育委員会、高山彦九郎記念館、本居宣長記念館、広島県立歴史博物館、山口県教育委員会、水戸市教育委員会、足利市教育委員会、備前市教育委員会、防府市教育委員会、山口市教育委員会、下関市教育委員会、大分市教育委員会、竹田市教育委員会、佐伯市教育委員会、日枝玉峯、日枝陽一、廣瀨貞雄、西村謙治、原田俊隆、廣瀨洋一、園田大、合原多賀雄、荒金大琳、島元貴、高橋昌彦、市川寛明、岩崎仁志、山崎一郎、吉積久年、藤重季恵、恒遠俊輔、大野雅之、福田寺全亘、毛利元敦、植田兼司、柴原直樹、田中洋一、関口慶久、市橋一郎、久保賢史、板橋稔、石井啓、井上靖子、池邊千太郎、工藤心平、甲斐玄洋（順不同・敬称略）

## はじめに

江戸時代後期の文化一四（一八一七）年、儒学者廣瀬淡窓は豊後国日田郡に私塾「咸宜園」を創設した。全国から約五〇〇〇人の門下生が入門した咸宜園は、当時としては日本最大規模の私塾であった。その後、明治三〇（一八九七）年に閉塾したが、これまでの咸宜園跡の発掘調査では塾生が使用した生活雑器や赤間硯などの文房具が発見されている。

赤間硯は江戸時代に広く流通した硯で、長門国（山口県）や豊前国（福岡県）で採石・加工され、赤間関（現下関市）で販売されていた。現在も赤間硯は山口県宇部市や下関市などで製作・販売されている。

廣瀬淡窓も「赤間硯」を愛用したとされるが、廣瀬家には現在も弟の久兵衛や旭莊などの硯が数多く遺されるほか、当市には咸宜園跡から出土した「赤間関」や塾生の来歴に関する「明正寺」などの銘を持った硯がある。

当時の文人や学問を志す若者たちにとって、硯は筆・墨・紙などと並んで必携の具であったが、文人の間では鑑賞用として文房趣味が広がるなど、文房具に対する関心は極めて高いものがあった。

そこで、本展では淡窓の愛用した硯を始め廣瀬家秘蔵の文房具や江戸時代の文人が愛用した遺品

のほか、「天下一」の銘を刻む赤間硯の逸品や赤間硯の歴史を物語る上で欠かせない重要な史資料を展示公開することにした。

また、本年四月に「近世日本の教育遺産群・学ぶ心・礼節の本源」として日本遺産の認定を受けたことを記念し、認定自治体の構成文化財である旧水戸彰考館跡（水戸市）や足利学校跡（足利市）で出土した硯や旧閑谷学校関係の資料も特別に展示を行う。

## 文人と硯

硯は、筆や墨と同じく消耗品であるが、長く愛用されることも多く、また素材が石製であることから比較的伝世しやすいものと考えられた。しかしながら、江戸時代の学者や画人など文人たちが愛用した硯を求めると、実際に確認できる例は少ない。そこで文人の肖像に画かれた文房具に着目

した。貝原益軒は筑前福岡藩の儒学者であるが、

当資料は大正時代に模写された肖像である。机上には硯箱や文鎮が描かれ、箱の中には長方硯・水滴・筆・筆架・墨などが見える。また伊勢の国学者・本居宣長肖像にも赤紫色の長方硯（赤間硯カ）や水滴などが描かれる。そのほか、江戸時代後期の儒学者で漢詩人として活躍した篠崎小竹や「豊後の三賢」の一人で儒学者の帆足万里などの肖像にも硯は画かれている。小竹の硯は大振りで長円形の天然硯と思われる。また万里の硯は小型の天然硯で木の葉型の形状をしている。これらの硯はいずれも現在伝わっていない。

一方、豊後日田の廣瀬家には咸宜園を開いた廣瀬淡窓や弟の久兵衛、旭莊などが愛用したとされる硯が伝わる。産地が特定されるものでは長門名産の「赤間硯」が最も多いようである。



貝原益軒肖像（福岡大学高橋研究室蔵）



本居宣長肖像（本居宣長記念館蔵）

第一章 廣瀬家の至宝



廣瀨家の人々

豊後日田の廣瀨家は初代五左衛門貞昌が延宝元(一六七三)年に筑前博多から日田に転住し、豆田魚町に居を構えたとされる。

江戸時代、日田の繁栄を支えた豪商・廣瀨家には廣瀨淡窓(通称は求馬)を始めとする、後に「廣瀨八賢」と呼ばれた先賢がいた。

天保五(一八三四)年、淡窓は弟の久兵衛(号は南陔)や三右衛門(号は棗園)、謙吉(号は旭莊)らとともに『廣瀨家譜』をまとめた。そこには日田廣瀨家の祖先は甲斐の武田信玄の家臣で廣瀨郷左衛門の弟將監正直とし、その後、正直の孫が日田に移住して初代五左衛門貞昌となったとする。

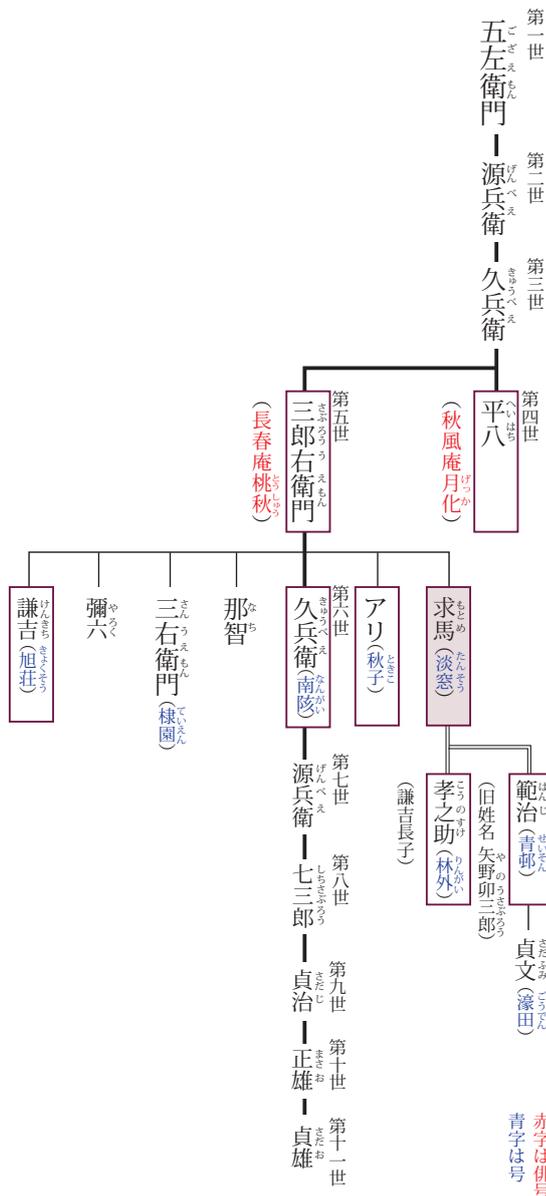
日田における廣瀨家の繁栄は家業の発展だけではなく、高い文化力にある。学問や文学など文化的志向を高めたのは三世の久兵衛の時とされる。久兵衛は俳諧を能くし俳号は桃之と称していた。後に四世を継いだ平八(俳号は秋風庵月化)は九州俳諧の中心として活躍し、また弟で五世の三郎右衛門(俳号は長春庵桃秋)も俳諧を好んだ。三郎右衛門は、淡窓や秋子(通称アリ)、久兵衛、旭莊の父として、早くから学問や文学の手ほどきをしている。そのため、淡窓や旭莊は青少年期から学問の才能を発揮し、著名な漢詩人となった。また、六世の久兵衛は、兄の淡窓に代わって家督を継いだ経世家・土木事業家として知られるが、

淡窓の学問や咸宜園の経営など教育活動を経済面で支えたことの功績も高い。また本人も俳号を扶

木として文学を愛した人物の一人であった。

廣瀨家略系図

※ 太枠は廣瀨八賢



赤字は俳号  
青字は号

廣瀨八賢(廣瀨家には逸材が多く「淡窓」を含めた廣瀨家の八人は廣瀨八賢と呼ばれている。)



## 廣瀬八賢の硯と文房具

廣瀬八賢とは、淡窓の伯父月化を始めとして、父の桃秋、淡窓、秋子（淡窓の妹）、久兵衛、旭莊、青邨（通称は範治。淡窓の義子）、林外（通称は孝之助。淡窓の嗣子）の八名である。

廣瀬家には、これら八賢に関わる豊富な資料が収蔵されるが、その内、文房具については、現在、淡窓所用と伝わる五点の硯や筆洗、久兵衛所用の硯や旭莊の遺品である硯・文鎮など、そのほか不詳の硯や水滴、筆架など各種文房具が揃っている。また、八賢にはそれぞれ肖像が伝わるが、その内、文房具が描かれているのは平八、秋子、久兵衛の三人である。

月化（一七四七・一八二二）は九州俳諧の中心的役割を果たした人物であるがその肖像を見ると、短冊を持った右手の脇に朱色の漆を施した硯箱が見える。中には黒色の硯と筆などが収まる。



廣瀬月化肖像  
(廣瀬資料館蔵)

次は秋子（一七八四・一八〇五）の肖像であるが、淡窓の二才下の妹で幼い頃は淡窓と非常に仲の良い兄妹であった。兄思いのエピソードとして、

淡窓が病の時に献身的に看病する姿を淡窓本人が後に記録している。その秋子も二〇才で京の風早局に伺候したが、二二才の時に傷寒に罹り早逝した。肖像は後に描かれたもので、宮中務めをしていた頃をイメージしたものである。秋子の背景には文台と蒔絵で装飾された硯箱が見える。



廣瀬秋子肖像  
(廣瀬資料館蔵)

次に、久兵衛（一七九〇・一八七二）の肖像は人物像の背景に中国風の意匠をあしらった文机と机上には太子硯や秩が載る。

現在廣瀬家には久兵衛所用の道具箱（No.18）や手箱（No.19）が伝わり、中にはいずれも赤間硯が収まっているが肖像に描かれた太子硯はこれまで確認されていない。



廣瀬久兵衛肖像  
(廣瀬資料館蔵)

## 淡窓と旭莊の硯の類似点

淡窓の硯と伝わる門司硯は、縦一二六×横一〇〇×高二二mmを測り、硯背の覆手に「豊前田野浦住 大神保名」と銘刻する。一方、弟の旭莊の硯は赤間硯と見られるが、大阪天王寺の邦福寺墓所に埋葬されていた遺品で、縦一二六×横九〇×高二四mmを測る。江戸時代、赤間硯の硯石は豊前国の白野江や大積で産出された石材を使用した時期があり、文字関硯石とも呼ばれていた淡窓の硯は赤間関の対岸である田野浦の硯師大神氏の作である。両者を比較すると、硯石の色は異なるがどちらも貞岩で、墨堂右側の筆置きとみなされる箇所や、硯首の右片方と硯尾の両角を削り取るなど、従来の赤間硯には見られない造作があり、寸法や加工に特徴のある二点の兄弟の硯は今後注目したい。



淡窓（左）と旭莊（右）の硯  
(廣瀬資料館蔵)

廣瀨家と高山彦九郎・釈法蘭

廣瀨家と高山彦九郎

高山彦九郎（一七四七・一七九三）は上野国新田郡細谷村（現群馬県太田市細谷町）出身の江戸時代中頃の勤王思想家で、幕末の勤王の志士たちに大きな影響を与えた人物である。また、林子平や蒲生君平とともに「寛政の三奇人」の一人に数えられている。

この彦九郎も「赤間硯」を愛用したことが知られている。所用硯を見ると、硯背には「赤間関正清作」と銘が刻まれている。

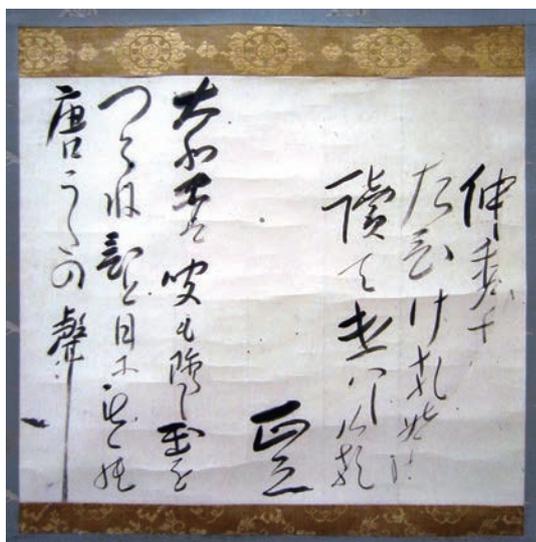


高山彦九郎所用硯（高山彦九郎記念館蔵）

寸法は縦二四三mm、横一二二mm、高さ四七mmと比較的大きな赤間硯である。

彦九郎と廣瀨家には交流があった。彦九郎は寛政五（一七九三）年四月、豊後日田に廣瀨淡窓の父桃秋のもとを訪問している。その当時一二才の廣瀨淡窓に出会い、後に桃秋は淡窓が作った漢詩を彦九郎に送ったとされる。それを受けて、次のような彦九郎の和歌が残っている。

「大和には聞くもめずらし珠をつらね一日に百の唐歌の声」



高山彦九郎書（日田市教育委員会蔵）

淡窓は一日に唐歌（漢詩）百首を詠む才能の持ち主であると詠っている。高山彦九郎は、少年期の淡窓の才能をいち早く見出した人物の一人であった。

法蘭上人と廣瀨淡窓

法蘭（一七二八・一七九四）は豊後国日田郡出身の真宗僧侶で、広円寺の第六世となった人物である。号は錢塘とした。法蘭は詩書にすぐれた父道寧の薫陶を受けて、肥前の大瀬について学んだ。学僧としても名高く、淡窓も一〇才の時から漢詩の手ほどきを受けている。淡窓の自叙伝「懷旧樓筆記」には法蘭の記事が幾つも見えるが、当時の日田はすでに詩壇が形成されており、法蘭の広円寺や廣瀨家などで開かれた詩会では常に法蘭が中心的人物であったことがわかる。寛政六（一七九四）年、法蘭が没したとき、一三才の淡窓は遺族より形見として水滴を贈られている。そのことについて、淡窓は次のように述べている。

「懷旧樓筆記 卷四」（抜粋）

寛政六年九月の条

今年九月十三日。法蘭上人卒セラレタリ。其時余猿渡ニアリ。歸リテ後。往イテ弔セリ。其室水滴一ヲ以テ余ニ贈ラル。曰ハク。遺物ナリト。今家ニ蔵セリ。上人年六十七ナリ。其詩集世ニ伝ハレリ。故ニ此ニ其詩ヲ録セス。

現在、廣瀨家には数点の水滴が伝わっているが、その中に法蘭の遺品である水滴が含まれるかどうかは確認できない。

# 第二章 咸宜園との交流



菅茶山



田能村竹田



中島子玉



恒遠醒窓

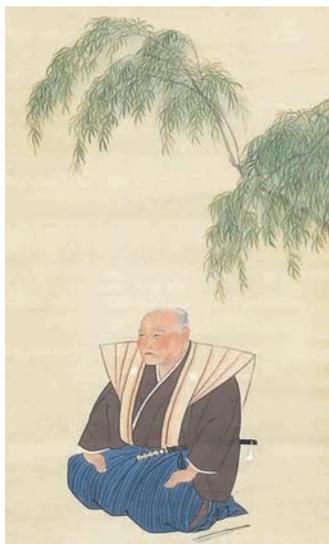
咸宜園は文化一四（一八一七）年に廣瀬淡窓が豊後国日田郡堀田村に創設した漢学塾である。

当時、日田は西国筋郡代の置かれた九州幕府領の重要な拠点であり、西国を旅する文人墨客が多く訪れていた。ここでは咸宜園や廣瀬淡窓と交流のあった人物の文房具を紹介する。

### 菅茶山と廣瀬淡窓・旭荘

菅茶山（一七四八・一八二七）は備後福山藩の人で、儒学者・漢詩人として活躍した。

天明年間（一七八一・一七八八）に神辺で私塾「黄葉夕陽村舎」（後の「廉塾」）を開いて門弟の指導を行った。神辺本陣の亭主・菅波信道が受講の様子を描いた「廉塾講義の図」（『菅波信道一代記』）は当時の学びの風景を知る上で貴重な史料となっている。



菅茶山肖像（広島県立歴史博物館蔵）

この塾には創設間もない頃の咸宜園を訪問した頼山陽も学んでいる。

淡窓は晩年に「懐旧楼筆記」なる自叙伝を記しているが、その中で病没する三か月前に茶山のもとを訪れていた弟旭荘の記事が見える。

茶山は旭荘を介して自らが愛用していた硯を淡窓に贈ったことが記される。そしてまた、淡窓はその硯が「懐旧楼筆記」を編纂していた頃は自分の家（咸宜園のことか）にあったとしている。両者は面会する機会こそなかったが淡窓は漢詩の指導を書簡で請うており、茶山もその才能を認めていた。

現在、廣瀬家に一〇点を超える硯が伝わるが、残念ながらそれらの中に含まれているかどうかは不明である。

「懐旧楼筆記 卷二十一」（抜粋）

文政一〇（一八二七）年九月の条

余二十七歳ノ時。詩稿ヲ茶山ニ寄セテ。筆削ヲ乞フ。是交リヲ納ルルノ初ナリ。其事既ニ前ニ出セリ。此人極メテ人ノ善ヲ称シ。人ノ美ヲ挙ク。余名ヲ山陽以東ニ伝フルコト。此人ノ悠揚ニヨルコト多シ。師弟ノ名ナシト雖モ。知己ノ遇。思ハスンハアルヘカラス。謙吉歸帰ル時。硯一面ヲ以テ余ニ贈リテ云ハレケルハ。僕世ヲ去ルコト近キニ在リ。是遺物ナリト。硯今家ニ蔵セリ。茶山ノ歿（没）ハ。

七八月ノ頃ナルヘシ。歳八十ナリ。

現在、茶山が愛用した硯箱が遺されている。箱には硯・墨・小刀が収まる。蓋の表書きには「黄葉夕陽村舎」と塾名が朱書きされている。



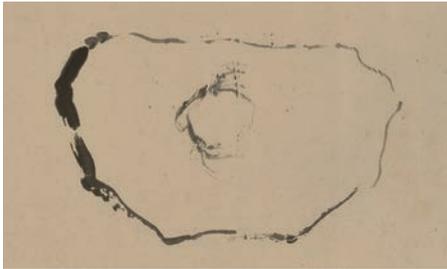
菅茶山所用硯箱 表蓋「黄葉夕陽村舎」（広島県立歴史博物館蔵）

菅茶山は文政一〇（一八二七）年八月一三日に八〇才でこの世を去っているが、葬儀の仔細を記録した「文恭先生喪儀」という史料がある。中には、副葬品を示した箇所があるが「明器」とした項目には、木硯一枚・墨一錠・紙一帖・筆一柄が含まれていた。文人として生きた茶山らしい明器の内容と言える。

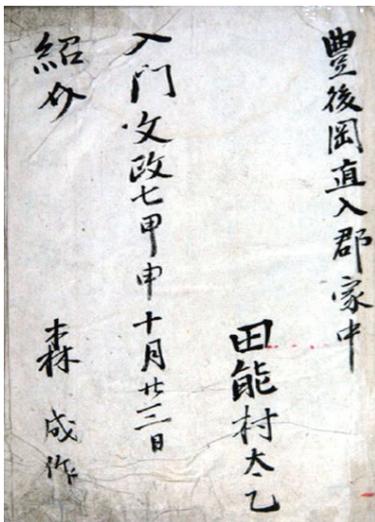
## 田能村竹田と廣瀬淡窓・咸宜園

田能村竹田（一七七七—一八三五）は豊後国岡藩の人。藩医の家に生まれたが、画家として活躍した。『豊後国志』の編纂では中心を成した。淡窓との交流は『淡窓日記』によれば竹田は「田能村行蔵」として記録されている。咸宜園を訪問した記事もあり、その交流の深さを知ることができる。また、竹田の子・太乙（一八〇八—一八九六）は文政七（一八二四）一〇月三日、一七才のときに咸宜園に入門した。

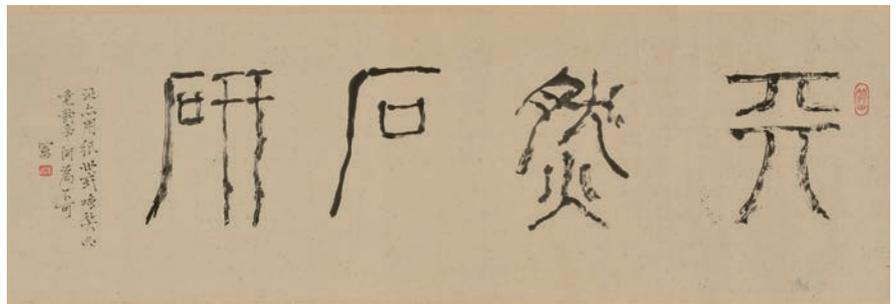
現在、竹田が愛用したとされる硯が伝わっている。その硯の姿は竹田本人が描き残し、その名を「天然石研」と呼称した。また、如仙もその硯について記した書が伝わる。



上：田能村竹田所用硯、下：天然石研図巻（田能村竹田画）竹田市立歴史資料館蔵



咸宜園入門簿「田能村太乙」  
（廣瀬資料館蔵）

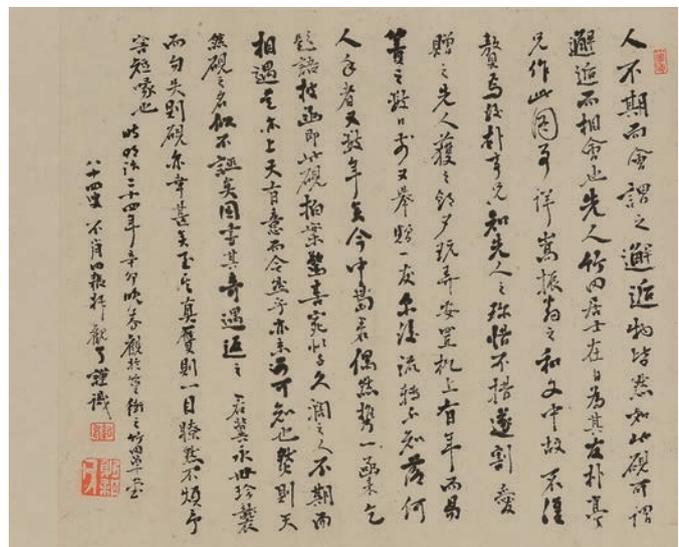


天然石研図巻（田能村竹田書 / 竹田市立歴史資料館蔵）

## 咸宜園門下生の文房具

江戸時代、私塾咸宜園には全国各地から門下生が入門しており、当時は塾内に各地で生産された硯を始めとして、多種多様な文房具が使われていたと思われる。咸宜園跡で発掘された硯には「赤間関」の銘や入門者の来歴を示す「明正寺」の銘が刻まれるなど、当時の生活を物語る資料が出土している。

ここでは淡窓の門下で咸宜園を代表する門下生たちが所用した硯や硯屏を紹介する。



天然石研図巻（田能村如仙書 / 竹田市立歴史資料館蔵）

恒遠醒窓の硯

恒遠醒窓は豊前国薬師寺村出身の儒学者で文政二（一八一九）年、咸宜園に入門した。退塾後は郷里で私塾「蔵春園」を経営し、三〇〇〇人も門弟を育てた。醒窓の硯は多く伝わるが中でも平戸藩で講義した際に藩主より拝領した硯は縦二九五、横一九四、高さ三〇mmの大型長方硯である。硯首の端部の両角を削り落とすのが特徴的である。なお硯尾側は隅丸となっている。



恒遠醒窓所用硯  
(平戸藩主からの拝領品、個人蔵)

次の硯は赤間石の天然硯である。硯背は平底で覆手は無く、横方向の研り痕が縦に走る。また「紫」「金」「石」と彫られた銘が上・中・下に分けて配置されている。

赤間硯には色調の異なる五種類の硯石が採用されていたが、その中でも「紫金石」と呼ばれる縞状に発色の異なる石材が一番高価とされている。



恒遠醒窓所用硯に彫られた  
「紫金石」の銘 (個人蔵)

大村益次郎の硯屏

大村益次郎は長門国鑄銭司秋穂出身の医家で、兵学者として日本の近代陸軍の祖とされる人物である。咸宜園には天保一三（一八四二）年に入門し、その後、緒方洪庵の適塾で蘭学を学んだ。適塾では塾頭を務めた秀才であった。

大村の遺品の中には硯は見当たらず、文房具は皆無に等しいが、唯一伝わるのが硯屏である。これは火山岩質の石製品で前後も判然としない状態であるが益次郎の郷里・秋穂の山々の景色にも通じるところがあり、趣深い文具である。



大村益次郎所用硯屏 (山口市歴史民俗資料館蔵)

中島子玉の硯

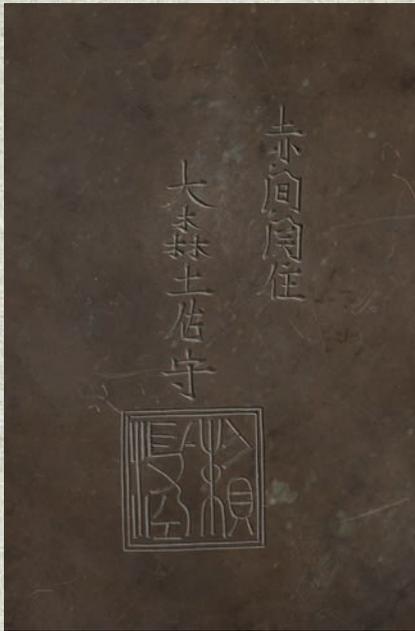
中島子玉は豊後佐伯藩の藩士であった。藩命により同藩の古田豪作と二人で文化一三（一八一六）年、桂林園（咸宜園の前身）に入門した。子玉の才識は門下生の中でも秀逸であり、淡窓も自らの門下で一番の才能の持ち主と評価した。その後、江戸の昌平坂学問所での遊学を経て、佐伯藩の藩学教授となったが天保五（一八三四）年、三四才で病没した。

子玉の硯は計七点伝わるが、その内、長方形の赤間硯があり、四辺がタタキ仕上げとなっている。また、写真右上の硯の形状が恒遠醒窓の所有する拝領品と類似している点は興味深い。



中島子玉所用硯 (佐伯市教育委員会蔵)

# 第三章 天下一の赤間硯



赤間硯とは

「赤間硯」は現在の山口県下関市の古称である「赤間（関）」の地名を冠し、この場所の名産であったことからついた名称である。石材は頁岩（赤色）とされ、古くは豊前国の白野江山中や大積山付近（現在の北九州市門司区）で産出したものを加工・製作していたが、一八世紀中頃以降は旧長門国厚狭郡（現在の山口県山陽小野田市から宇部市）に採石の中心が移った。このように産出地が広範囲にわたるほか、石材も紫色を基調とした紫金石や紫雲石、紫青石など五種類がある。

赤間硯は、昭和五十一年に国の伝統的工芸品に指定され、現在も宇部市や下関市で製作される。

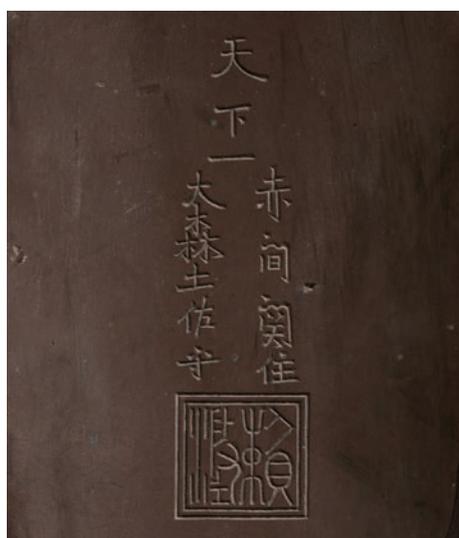
日本の硯の歴史については、『本邦古硯考』によれば『正倉院文書等』には「研」または「硯」と表記されたほか、『倭名類聚抄』の記事から当初は「スミスリ」と呼ばれていたようだが、『枕草子』や『源氏物語』では「スズリ」とその読み方は変化している。このような呼称の変化の時期や陶硯から石硯へと材質が変化する時期として、一〇世紀後半頃とする説がある。

次に赤間硯の始まりについて、物証としては鶴岡八幡宮に源頼朝が奉納した赤間硯の存在が広く知られるが、異説もあるものが事実ならば一二世紀末には赤間硯の生産はすでに始まったことになる。

また文献上では、江戸時代初期に記された『梵舜日記』（一六一二）に「赤間硯」とあるのが初出とされるが、赤間硯の生産が始まった時期には定説がなく、はっきりとしたことは判っていない。赤間硯の特徴として、硯の裏面（硯背）に「赤間関」や「赤間関住」とともに硯の製作者である「大森土佐守」などの文字（銘）が刻まれている例が多く知られ、石材の紫色と併せて赤間硯の存在を知る手がかりとなっている。現在、伝世した資料や各地の発掘調査で明らかとなった在銘の赤間硯は北海道から沖縄県まで広がっている。（岩崎二〇一四）

在銘の赤間硯で来歴が明らかな資料として戦国の武将で毛利輝元所用の硯が知られる。

この硯には、「天下一 赤間関住 大森土佐守」と銘が刻まれているが、この件に関して「長府藩の御用硯師を務めた大森家譜によれば、応



毛利輝元所用硯（毛利博物館蔵）：硯背

赤間硯の名称（年代の明らかなもの、『古事類苑』・『下関二千年史』をもとに作成）

表記	文献	備考
赤間硯	『梵舜日記』（慶長17年：1612）	
	『下関二千年史』（大正9年：1920）	第17節「名物」の見出しとして
長門紫硯	『毛吹草』（正保2年：1645）	
硯石	『本朝字府秘伝』（宝永6年：1709）	
	『筑紫紀行』（享和2年：1802）	「此地（下関）の名産にて、硯石を売家多し」菱屋平七（吉田重房）著
	『西遊記』（天明～寛政?：1781～1789?）	「赤間関の硯石は世の人皆知れる所なり」
赤間関紫硯	『扶桑記勝』：貝原益軒(1630～1714)	
赤間石	『萬金産業袋』（享保17年：1732）	「硯石」として紹介
赤間関	『雅遊漫録』（宝暦13年：1763）	「硯石」として紹介
	『西遊雑記』（天明3年：1783）	「此辺の名産」。「硯石」として、石材産地とは別に紹介
名物の硯	『長崎行役日記』（明和4年：1767）	
赤間関の硯石	『太宰管内志』（天保12年：1841）	

（岩崎2006.3より一部改変）

永二（一三九五）年藤原鎌足の子孫の直幸新吾が、門司で製硯業を創始したとある。新吾は応永二二（一四一四）年、硯を將軍足利義持に献上し、「天下一土佐守」の称号を与えられ、その次の藤原直秀が延徳年間（一四八九〜九二）に下関に渡来して、製硯業を始めた。そして文禄元（一五九二）年、藤原次郎右衛門入道芳清は豊臣秀吉から大森の姓を賜った。さらに元和四（一六一八）年、芳清の子の大森頼澄は、硯を後陽成天皇に献上し、再び天下一の刻銘を許されたという。（山口県赤間硯生産協同組合）と説明されている。「天下一」の称号は、天和二（一六八二）年、徳川綱吉により「天下一」の称号を使用禁止する令が出たことから、その後生産される赤間硯には硯司の側から「天下一」の銘を刻むことは無くなった。

近世以降の赤間硯の発展は目覚しく、学問の普及や庶民の学習意欲の向上に伴いその需要も大きく高まったものと考えられる。また、歴史上の著名な人物もこの赤間硯を愛用したことが知られる。特に幕末維新期における人物と赤間硯とのエピソードは枚挙にいとまがない。

生産地の長州（現在の山口県）では吉田松陰が愛用した赤間硯（20・21頁コラム参照）が松陰神社（萩市）のご神体となっている例を始め、幕末の志士三吉慎蔵（長州藩）は西郷隆盛や坂本龍馬などに装飾付きの赤間硯を贈っており、現在も西

郷が所蔵した硯が伝わっている。

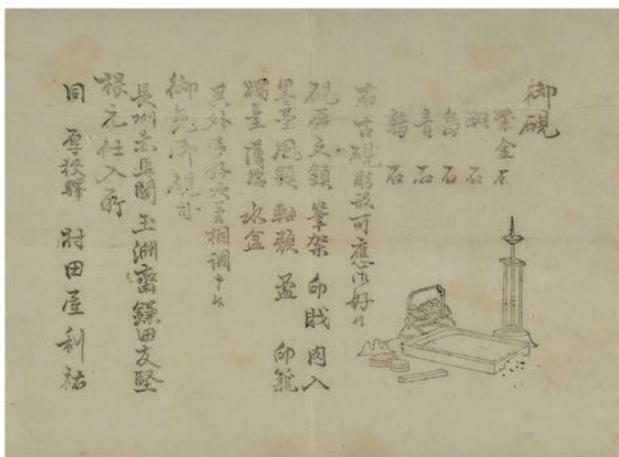
また先に紹介した高山彦九郎（8頁参照）も「赤間関正清作」と銘の入った硯を愛用した。

### 文献史料に見る赤間硯の制作と販売

赤間硯の生産は、筑前博多で一二世紀前半から赤間石（紫色の石材）を使用した制作が始まったとされ、博多支配を確立した中世大内氏により朝鮮への輸出拡大もあって硯の生産は盛んになったとされる。

また、赤間硯の石材供給地は豊前田野浦（白野江や大積等）から長門厚狭へと移り、製造は長門赤間関（下関）が中心となっていた。また、採石・製造・販売が分職するのは一八世紀後半と考えられている。

一方、販売に関しては、宝永四（一七〇七）年の「万請取手紙留（徳山毛利家文庫）」には硯の代金とともに硯石の種類と装飾（彫り物）の例が示され、大原数馬や大森土佐といった硯司の名前も記される。大森土佐（守）は「天下一」の称号を許された赤間硯を代表する硯司である。また「長州厚狭駅村田屋利祐 赤間関硯広告（塩田家文書）」なる史料もある。いわゆる硯などの文房具に関する広告チラシで、紫金石、斑石、島石、青石などの硯石の種類のほか硯司の鎌田友堅の名や石材の供給元などの情報が多く含まれる。



引札 「長州厚狭駅村田屋利祐赤間関硯広告」  
（塩田家文書 / 山口県文書館蔵）



万請取手紙留・宝永四年八月五日  
（徳山毛利家文庫 / 山口県文書館蔵）

## 赤間硯の歴史年表（2）

西 暦	年 号	事 項
1935	昭和10年	厚狭高等女学校の『青葉会誌』の中に同校教員梅田茂雄が著述した『厚狭町の化石と硯石』という論文があり、これには「一、赭色擬灰岩は赭色で密である。成分は石灰微細なる長石にして雲母様微晶褐色にして、微粒様泥化せる輝石である。二、この石船木の北森広より出る。岩滝にては100米内外なり。三、硯石統中には未だ化石を見ず、時代未詳である。四、赤間硯の創始は徳川時代であるが、その集散地が赤間閘だったので赤間硯の名称と呼ばれているが、実は厚狭硯か万倉硯というべきであろう。五、最近山口県工業試験場で、硯製造の際に生じた残屑が、陶器の釉薬として適当であると発表されている。六、専ら農業の副業として、農閑期に小規模な産業として行なわれる。」と記述してある。
1938	昭和13年	厚狭に赤間硯製造株式会社が発立され、家内工業から工場工業に移動したが、1937年から起こっている支那事変の影響を受け、労働力を軍需産業にとられ、設立まもなく一時中止される。
1949	昭和24年	六三制実施に伴って、習字が義務教育から外されて、自由教科となる。
1951	昭和26年	『厚狭郡誌』に岩滝自治会に「現在では農業の副業として、須子昇進堂・日枝玉峯堂・柳井留一・伊藤助次郎・原田易馬の各氏が僅かにやっていることは、本村の特産物として寂しいものである。」とあり、五名が制作していたことが確認できる。
1957	昭和32年	『防長風土記』の中に、「万倉地区硯工五戸で硯二千五百個産出」と記述してある。
1958	昭和33年	厚狭の長門石材株式会社で再度工場工業として生産を始めたが、工場生産に適さず、また厚狭での硯石を掘り尽くしたため、三年間で中止される。
1968	昭和43年	小学校で習字が正課として復活する。
1973	昭和48年	赤間硯組合の資料によると、岩滝自治会に13軒、28名の従事者、岩滝自治会以外に4軒、6名の従事者がおり、年間約7000個生産していたとされる。
1975	昭和50年	赤間硯協同組合設立。赤間硯協同組合の構成員は、下井利弘・阿野ミチル・堀実・植野鉄雄・柳井猛・縄田民人・林益良・下井百合昭・日枝敏夫・伊藤孝夫・島川春美・寺田恒若・日下健一の13人で従業員総数は29人であり、大部分は配偶者及び家族である。
1976	昭和51年	通商産業大臣（現在の経済産業大臣）により伝統的工芸品に指定される。
1978	昭和53年	伝統的工芸品認定によって、昭和53年から昭和58年まで、伝統的工芸品産業振興事業が行なわれる。内容は新しい坑道を開けるための調査・後継者の育成・技術技法の改善向上・需要の開拓・作業環境の改善・従事者の福利厚生増進・消費者への情報提供などの産地基盤の強化を図るための長期的なものである。
2001	平成13年	現在の硯職人として、岩滝自治会に柳井猛・下井百合昭・下井利弘・日枝敏夫・下井昭弘の5名、下関市に堀尾信夫・岡田清（岩滝自治会出身者で若田石も制作）の2名が僅かに制作している。

（日枝2002より一部改変）

## 文献に登場する主要な硯・硯材

（年代の明らかなもの、『古事類苑』・『下関二千年史』をもとに作成）

文 献	主要な硯または石材
『毛吹草』（1645）	（山代）硯細工 高嶋硯 高田硯 <b>長門紫硯</b> ヲガチ硯石 土佐硯石 <b>文司関硯石</b>
『雍州府志』（1684）	洛西嵯峨 大井川 洛東高野川 丹波石王寺之石 <b>周防国</b> 土佐国 美作国高田
『本朝字府秘伝』（1709）	熊野那智 江州高島 <b>長州下関</b> 肥州焼山 城州鳴滝
『和漢三才図会』（1712）	<b>長州下関</b> 若州宮河 江州高島 洛西嵯峨 下級品として天草 予州 *「 <b>長門国土産</b> 」として「 <b>硯石</b> 」
『萬金産業袋』（1732）	土佐石 水尾 高田 石王子 若狭 <b>赤間石</b> 高島 佐渡石
『雅遊漫録』（1763）	江州高島 <b>長州赤間関</b> 播州赤石 若州宮川 城州嵯峨 常州鹿嶋 作州 佐州海石
『好古小録』（1795）	土佐石 石王寺 雨端 鳳足 月輪 高雄 高島 日光石 桜川 寒水島寒水 黒山 金鳳石 養老 内山石 高田 加茂川石 高野川石 鏡石 二見石 白石 白浜石 高浜 木葉石 高山石 <b>赤間関</b>
『和漢研譜』（1797）	清滝石 鳴滝石 月輪石 鴨川石 石王子石 虎斑石 紅梅石 養老石 馬蹄石 葡萄石 <b>紫金石</b> 金鳳石 藍石 雨端石 青石 瑪瑙石 桜川石 豆斑石 琥珀石 研崑石 玉川石 高田石 瑪瑙石 啄瀨石 木葉石 黄石 溜石 衣滴石 寒水石 嶋石 白石 青雲石 内岩石 鏡石 高岩石 若獅子石 高野川石
『一話一言』（1779-1820）	丹波石王子 美作高口 土佐室石 若狭宮川石 三河鳳来寺 紀伊那智黒 仙台雄勝石 常陸桜川石 駿河阿部石 駿河葡萄石 肥後八代石 <b>長門赤間関</b> 近江高島 さらに「追而書付越候分」として 美濃養老之滝辺ヨリ出候石 越前石 水戸かんすい石 阿波石 越後石 高尾石 水尾石 うずまき石 紀伊石 木葉石
『米庵墨談』（1812）	若狭宮川石 山城嵯峨愛宕石 <b>長門赤間石</b> 甲斐雨端石 陸奥桜川石 肥前田浦石 備中高崑石 対馬若田石 参河金鳳石
『硯材誌』（1886）	宝名石（蓬萊寺石 金鳳石） 丹波石王寺石 <b>赤間石（紫金石）</b> 宮川石（若紫鳳足石 紅梅） 紀伊琴浦石（若山石） 那智黒石（溜石） 白浜石 山城鴨河石 嵯峨石 粟御崎石（月輪石） 高雄石（清滝石） 高野川石 鳴滝石 土佐西寺衣石（衣滴） 嶋石 美作高田石 雨端石 桜川石 日光石（研崑石） 陸奥赤間石 正法寺石 近江高島石 常陸小久慈石 鼈甲石（斑石） 馬蹄石 *（ ）は「一名〇〇」と記されたもの

赤字は「赤間硯」に関する記事

（岩崎2006.3より一部改変）



## 赤間硯の歴史年表 (1)

西 暦	年 号	事 項
1191	建久2年	源頼朝が後白河法皇より拝領した「風字硯」を現在の神奈川県鎌倉市の鶴岡八幡宮に奉納する。 『平家物語』で建礼門院が壇ノ浦に入水されたとき、御衣の袂に御硯を入れたとされているが、御硯が赤間関のものとされている。
1395	応永2年	直幸新吾が現在の福岡県北九州市門司区で硯彫り業を始める。直幸新吾は藤原鎌足の九代の末流とされている。
1422	応永29年	直幸新吾の子孫、市郎兵衛直秀が土佐守玉雲齋と称す。
1489～ 1492	延徳年間	市郎兵衛直秀改め、土佐守玉雲齋が赤間関（現在の山口県下関市）に移住する。
1538	天文7年	大内氏が対外貿易に「紫石紋硯」を輸出する。
1592	文禄元年	豊臣秀吉が次郎右衛門入道藤原芳清に大森家の家名を与える。初代大森次郎右衛門芳清が誕生する。
1618	元和4年	二代大森太郎次郎頼澄（芳清の子）が後陽成天皇に「竜門のすずり」を献上し、宣旨を受ける。
1643	寛永20年	三代大森頼元（頼澄の子）も宣旨を受ける。
1643～ 1741	寛永20年 ～寛保元年	四代大森仁左衛門の時、豊前国の硯石の採石が禁止になる。
1645	正保2年	松江重頼が『毛吹草』の中で「長州紫石」を挙げ、紫石の最高品と言っている。
1688～ 1716	元禄元年 ～享保元年	現在の山口県厚狭郡山陽町でも採石が始まる。後に藩の御島山に指定される。
1690～ 1692	元禄3年 ～5年	エンゲルト・ケムプェルの『長崎から江戸まで』の一部に「市内に至るところに店舗にして町の近き石山より切りださるる灰色の蛇紋の石を刻みてすずりなどつくる家多し」と下関市内の状況が記述してある。
1712	正徳2年	寺島良安は『倭漢三才図会』の中で『紫石のすぐれた硯石』と言っている。
1741	寛保元年	四代大森仁左衛門が、吉田宰判管内の地内、稲倉山（現在の山口県厚狭郡山陽町）に採石可能な場所を見つける。稲倉山を大森山と唱え、大森家に採石権が与えられ、また藩の御用硯師となる。その後採石場は、現在の山口県厚狭郡楠町まで広がり、しだいに山陽町や楠町でも制作が始まる。 長州国厚狭稲倉村畦頭の今橋十左衛門は、清安寺（現在の山口県厚狭郡山陽町）の目白不動明王の霊夢により、紫金石を掘り出す。
1767	明和4年	長久保赤水の『長崎行役日記』に『赤間関の町へ出て名物の硯を買う。紫石は当地の厚狭村より出づ、青石は豊前国田の浦大積山より出づという。』と記述してある。
1772	明和9年 安永元年	五代大森助左衛門のとき、硯株券が無ければ営業できなくなる。また藩の御用硯の硯職人として二十石を賜っていた。以後大森家は、政右衛門・半兵衛・茂十郎・瀬兵衛・直蔵を経て太郎次郎頼寿と続いていく。
1783	天明3年	『古川古松軒の西遊雑記』の中に「赤馬関と称する硯石はことごとく此の辺の名産なり。上品の石は厚狭村という処の山より出るといふ。この処へはゆかず、中古の石は大積山というより数多く出ることにして、夫を下の関へ渡すを硯に製して他国に出す事也。」と記述してある。
1827	文政10年	『厚狭郡風土記』の中に「厚狭郡山陽町に硯師が27軒あり、農業の副業として盛んになった。」とある。
1830～ 1843	天保年間	『防長歴史探訪』に「嘉兵衛という人が、偶然に自分の家の島のうちから掘り出した石で硯を作り出し、代々硯作りを始め、硯屋の姓を名乗るようになった。現在、広島県の宮島にある厳島神社には、硯屋氏の奉納した硯が残っている。」と記述してある。
1842	天保13年	『防長風土注進案』に「吉田宰判 厚狭村の部に硯師二十七件、徳銀六貫二百五十拾目、硯家二軒。 船木宰判 西萬倉村の部に硯細工徳銀百五十目。逢坂村硯師七軒、徳銀一貫二百六十目」の記述がある。
1868	明治元年	大森茂十郎の弟子、幼名は藤吉、字を寿満が大森家を相続する。名を太郎次郎頼寿と改める。 初代大森玉池軒の誕生。
1868～ 1875	明治元年 ～8年	初代大森玉池軒の長男頼三が廢嫡となり、二十四歳で上京し、硯師、珪泉堂（かくせんどう）を始める。
明治時代		明治時代の硯職人として、明治時代前期には松部十蔵（長府宮ノ前）・中島伊予吉（東南部町）・山名（入江町）・杉山（観音羊崎町）・盛永（神宮司町）・大山（入江町）がいる。明治時代中期には下津（西之端町）・三島（西之端町）・伊藤（西之端町）・枝村（西細江町）がいる。
明治5年以降 の記事		『防長歴史探訪（二）』には、楠町の制作について「明治になって学制が発布されてから、硯工業はにわかに活気をおび、硯工は一挙に10倍の200人余りに増えた。その製品は、小学生用の手ごろの品が大部分であった。」と記述してある。
1875	明治8年	初代大森玉池軒の次男源蔵が二代玉池軒となる。
1880	明治13年	二代玉池軒が東京博覧会の審査員となる。 厚狭郡厚狭村硯石鋳借区が開坑される。
1903	明治36年	二代玉池軒が長府毛利家の装飾方に選出される。 二代玉池軒の養子、久三郎が三代玉池軒となる。下関市では三代玉池軒・枝村・中島伊予吉の支店の三店になる。三代玉池軒は戦前急死し、また戦災によって家伝の『大森文書』も灰になり、大森家は廢絶する。 現在の厚狭郡楠町万倉・船木地区の硯業者間で価格表が定められ、その後赤間硯改良組合印定価格表が作成される。
1916	大正5年	『山口県治概要』雑工品の項に「厚狭郡万倉村及び厚狭村より切り出し、多くの赤間関にて製造販売するを以てその名あり。最も昔は門司付近より原材を切り出せしものなりという。石質は堅牢緻密なり。年産額一万四千六百円にして、販路は内地、台湾、朝鮮とす。」と記述してある。
1923	大正12年	『厚狭郡誌』に「万倉村で硯の製造が三十五戸で四千九百二十五個の生産をあげる。」と記述してある。 大森珪泉堂が下関に戻り、珪泉堂を起こすが失敗する。
1926	大正15年	『厚狭郡誌』の山陽町の項に「工業品として赤間硯の本場たる硯の製造がある…略…その発達は年を逐うて盛んになり、現今では十五萬二千余個を製造している。」と記述してある。



### ■採石方法

- ①原石の周囲をハンマーで叩き、断層のずれや割れ、不純物の有無を判断し、塊として採石できる方法を検討します。
- ②削岩機で石層を緩め、バールを断層のずれに差込み、テコの原理で浮かし、採石します。
- ③採石しようとする硯石の周囲が削岩機によっても崩せない時は、黒色火薬を使用します。

◀採石風景



▲坑内から硯石を出す風景

### 坑内からの運びだし

採石した硯石は、トロッコを使用して坑内から出します。



▲坑内から出された原石

## 硯 作 り



### ■型取り

必要な寸法にダイヤモンドの丸ノコで水を掛けながら切断します。角形の硯以外の丸形や小判形などは切断後、ノミやタガネで削ったり、砥石で修正したりすることで型取りします。

◀切断工程



▲割り出し工程

### ■割り出し

制作しようとする硯の厚さを考慮して割り出します。



▲割り出した面



### ■内彫り

#### 仕上げ彫り

全体の粗彫りを終えると、硯面のバランスに注意しながら粗彫りしたノミ跡を滑らかにします。硯によっては硯背（硯の裏面）を彫ることもあります。硯面と同様の方法で行いません。

◀硯面の最終仕上げ

### ■磨き



▲粗磨き

- ①砥石を使用して、内彫りしたノミ跡や平板作りの際使用した「円盤」で磨いた粗い面を滑らかにします。
- ②耐水ペーパーを180番・320番・600番と粒度を上げていくことで、表面を滑らかにしていきます。

### ■仕上げ



▲漆の塗布

### 漆の塗布

- ①漆を墨堂（丘）と墨海（海）以外に塗ります。
- ②漆が薄く均一になるように軽く布で拭きます。



▲拭きあげ



▲目立て

### ■磨き

#### 仕上げ彫り

墨堂（丘）と墨海（海）は耐水ペーパーを320番で止め、目立て石で研磨することで、固形墨が磨れるようにします。

# 図解 赤間硯 制作工程



硯の制作過程は何処の硯の産地でもほぼ同様の工程であり、新端溪硯のように各工程を分業して行なっているものを除いて、一般的には採石から制作、販売までを制作者が行なっていることが多い。この採石と制作の工程をまとめることで、伝統的に行なわれてきた制作を明確にすると同時に、作品制作時の変更点などを明らかにする。

## 採石



▲坑道の入り口

現在、採石している坑道の入り口は、かがんで入らなければならない高さです。坑道は標高130メートルの位置にあり、斜度約20度で長さ約25メートル入っています。

### ■内彫り

#### 縁の大きさ決め

硯面上に墨堂(丘)と墨海(海)の大きさを決めます。



▲縁の大きさ決め



▲線引き

### ■平板作り

「円盤」は厚さ約20ミリの円形の鉄板に水と珪砂を流し、これをモーターで回転させることで、硯石を研磨するものです。丸形や小判形などの型取りにも使用します。



▲「円盤」での平面出し

### ■内彫り

#### 縁立て

縁立ては彫る過程で最も重要なものです。縁立てをしっかりと行っていないければ墨堂も墨海も彫ることもできません。その良し悪しは制作後の道具としての用途も造形性にも大きく影響します。



▲縁立て

### ■内彫り



▲粗彫り

### 粗彫り

重さのある粗彫り用のノミやピックノミで粗彫りし、同時に墨堂(丘)と墨海(海)を繋ぐ胸を制作します。



▲胸彫り

### ■完成した硯



▲赤間 太史硯

### ■仕上げ



▲色粉の付着

### 色粉の定着

色粉を振り掛けると直ちに刷毛で軽く刷り込み、余分な色粉を落とすと同時に色粉を定着させます。



▲色粉の定着

## 吉田松陰の「功臣」赤間硯

松陰神社宝物殿至誠館

上席学芸員 島元 貴

「硯は己酉（嘉永二年 一八四九）の七月か、赤間関廻浦の節買得せしなり、十年余著述を助けたる功臣なり」――吉田松陰が、二十―三十歳の十年にわたり愛用した赤間硯を評した文章である。この硯は、長方形で、長辺五寸五分（約十六・六センチメートル）、短辺二寸五分五厘（約七・七センチメートル）、厚さ五分（約一・五センチメートル）で、特に装飾や彫り込みは施されていないシンプルなものであると伝わっている。

吉田松陰は、幕末萩藩の兵学者で、松下村塾を主宰し、高杉晋作・久坂玄瑞・伊藤博文・山縣有朋など、幕末維新期に活躍した多くの逸材を育て



吉田松陰肖像



松下村塾 石標柱のあたりに土蔵の祠が建立されていた

た。萩の松下村塾は、日田の咸宜園・大阪の適塾とともに幕末の三大私塾と呼ばれている。

松陰は、天保元年（一八三〇）に萩藩士杉百合之助・滝夫妻の二男として萩城東郊の通称松本村に生まれた。五歳で萩藩校明倫館の山鹿流兵学者範を世襲する吉田家の養子となり、六歳の時、養父で叔父にあたる吉田大助（杉百合之助の実弟で吉田家の養子となるも、子供がいなかったため甥の松陰を養子とした）の死により吉田家の当主となった。吉田家を継いだ松陰は、兵学者範となるべく、猛烈な勉学の日々を送った。やがて松陰は、世界中を植民地化していた欧米列強から日本をどう守るかを考えるようになった。

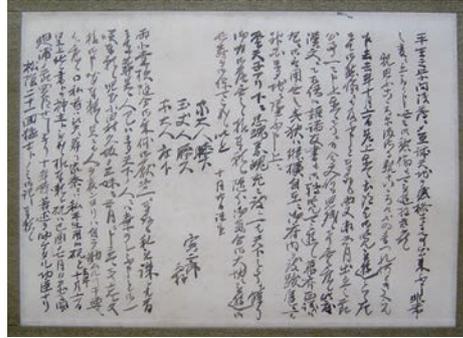
萩藩は三方を海に囲まれており、海岸線の防備を固めることが急務であった。松陰は藩命により「水陸戦略」という意見書を藩に提出し、海防の具体策を説いた。藩は松陰など兵学者・砲術家に萩藩領日本海沿岸を視察させ、海防の強化を図ることとした。松陰をはじめ視察団は嘉永二年（一八四九）七月六日から二十三日の十八日間をかけて萩から赤間関（下関）を視察した。この時、松陰が書いた旅日記「廻浦紀略」を見ると、船で旅をしながら海岸線の地形を検分し、敵が上陸できそうな場所や、台場を置くべき場所を確認し、各地の藩役人を訪問したことが記録されている。赤間関には七月十五日から二十日の間滞在し、亀山台場など各地の台場を検分して、巖流島に上陸、日和山に登るなど精力的に活動した。またかねてから文通していた豪商伊藤静斎を訪ね、自宅で頼山陽の息子頼三樹三郎と交流し漢詩を贈り合った。この十年後、松陰と三樹三郎は共に「安政の大獄」によって刑死しており、因縁めいた出会いとなった。冒頭にあるように、松陰愛用の赤間硯はこの視察旅行中に入手し、以後愛用したものである。

時は流れ、安政六年（一八五九）十月二十七日、松陰は「安政の大獄」によって江戸伝馬町の獄で斬首され、三十歳の生涯を閉じた。その一週間前、死罪を覚悟した松陰は、国許の親族に遺書

を認めた。今日でいう「永訣の書」である。この書に自分の死後、遺体などの処置について次のように遺言した。

「私首は江戸に葬り、家祭には私平生用候硯と去年十月（十一月）六日呈上仕候書とを神主と成され候様頼奉り候。硯は己酉の七月か：（以下本稿冒頭の文章と同じ）」

遺体は江戸に埋葬し、萩には愛用の赤間硯と自分が家族に宛てた書状を祀るように頼んでいるが、ここでいう「神主」は、神葬祭（神道式の葬儀形式）の霊璽のことで、仏教という位牌に相当する。松陰の実家杉家と養家吉田家では、杉百合之助・吉田大助兄弟によつて文政年間から祖先祭祀を神道式と仏教式の両方で行っていた。松陰は神道式祭祀での自分の霊璽としてこの二つを指定したのである。



永訣の書

杉家では遺言に従い、最初は邸内で硯などを祀っていたようだが、明治二十三年（一八九〇）に松下村塾の西隣に土蔵の祠を私的に建立し、そこにこれらを祀った。やがて松下村塾出身者などが

ら、この祠を公の神社とすべしとの発議があり、伊藤博文と野村靖の連名で神社創建の誓願書が山口県に提出され、明治四十年（一九〇七）に松陰神社が創建された。こうして、松陰愛用の赤間硯は現在に至るまで松陰神社の御神体として奉安されている。

吉田松陰は質素儉約を旨とする誠実な人柄だった。書画骨董には関心がなく、身の回りの物にもこだわりが無かったようで、所用品も数えるほどしか遺されておらず、それらも飾り気のないものばかりである。それに対して著述や抄録、手紙、写本などは膨大な数が遺されており、松陰神社と山口県が所蔵する関係資料で山口県指定有形文化財に指定されているだけでも一〇〇〇点を超える。松陰にとつてはこれらの著作物こそ、自身の志を反映したかけがえのない物だった。それらを生み出す上で必要不可欠だった

「功臣」赤間硯は、自らの



松陰神社神殿

魂が宿るのにふさわしいものだったのだろう。

【施設紹介】

松陰神社宝物殿至誠館

吉田松陰の遺墨・遺品などを展示、松陰が遺した遺書「留魂録」は必見。

開館時間 午前九時から午後五時まで

休館日 年中無休

入館料 大人五〇〇円・中高生二五〇円

小学生一〇〇円

所在地 山口県萩市椿東一五三七

電話 〇八三八―二四―一〇二七



松陰神社宝物殿至誠館

# 第四章 日本遺産

## 「近世日本の教育遺産群

「学ぶ心・礼節の本源」



## 日本遺産とは

国は地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを『日本遺産 (Japan Heritage)』として認定し、観光振興など地域活性化に役立てる仕組みを創設しました。

「文化財を活用した地方創生」、「文化財版クルジャパン」戦略として、文化財の保存・整備を図るだけでなく、観光資源として積極的に国内外へ発信し、活用するための新しい施策である。平成二七年は全国で一八件が日本遺産に認定されました。

以下、日本遺産の目的や概要、そして今回認定を受けたストーリーなどを紹介する。

### ●日本遺産の説明（文化庁HPより）

(1) 我が国の文化・伝統を語るストーリーを認定

「日本遺産 (Japan Heritage)」は、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定するものです。ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。

(2) 世界遺産や指定文化財との違い

世界遺産登録や文化財指定は、いずれも登録・指定される文化財（文化遺産）の価値付けを行い、保護を担保することを目的とするものです。一方で日本遺産は、既存の文化財の価値付けや保全のための新たな規制を図ることを目的としたものではなく、地域に点在する遺産を「面」として活用し、発信することで、地域活性化を図ることを目的としている点に違いがあります。

(3) 認定による効果

「日本遺産」に認定されると、認定された当該地域の認知度が高まるとともに、今後、日本遺産を通じた様々な取組を行うことにより、地域住民のアイデンティティの再確認や地域のブランド化等にも貢献し、ひいては地方創生に大いに資するものとなると考えています。

### ●認定のタイトル

「近世日本の教育遺産群  
—学ぶ心・礼節の本源—」

### ●認定自治体

茨城県水戸市、栃木県足利市、岡山県備前市、大分県日田市

### ●認定されたストーリーの概要

「我が国では、近代教育制度の導入前から、支配者層である武士のみならず、多くの庶民も読み書き・算術ができ、礼儀正しさを身に付けるなど、高い教育水準を示した。これは、藩校や郷学、私塾など、様々な階層を対象とした学校の普及による影響が大きく、明治維新以降のいち早い近代化の原動力となり、現代においても、学問・教育に力を入れ、礼節を重んじる日本人の国民性として受け継がれている。」

このように、日本の伝統や文化を語る上で我が国の魅力を十分に伝えるものとして高く評価されました。

日本遺産にはストーリーを構成する文化財群があり、これらを「構成文化財」と呼んでいる。

日田市では、廣瀬淡窓が創設した私塾「咸宜園」を中心として、淡窓旧宅や初めて塾を開いた長福寺など、さらに淡窓が生まれ育った豆田町が江戸時代の「学園都市」の姿を今に伝えるとして構成文化財になっている。

また連携して取組む茨城県水戸市には江戸時代を代表する日本最大規模の藩校「弘道館」があり、栃木県足利市には日本最古の学校「足利学校」、岡山県備前市には日本最古の庶民の学校である「閑谷学校」などの教育施設が中心となった教育遺産群が共に日本遺産の認定を受けた。

「教育遺産の文房具」

今回の展示では、この度の日本遺産の認定が教育をテーマとしたストーリーであったことから、各市の構成文化財に関係する文房具、主に硯についての展示コーナーを設けた。

まず最初に、水戸市では水戸城跡の発掘調査が数次にわたって行われているが、その内「旧水戸彰考館跡」の調査では廃棄された大量の硯が出土している。「彰考館」は水戸藩の修史局で、『大日本史』編纂のため当初は江戸小石川の藩邸に設置されたが、天保元（一八三〇）年水戸に統合された。展示は出土した高島硯である。滋賀県高島市の安曇川と鴨川にはさまれた阿弥陀山から産出する粘板岩によって製作された石硯を「高島硯」と呼んでいる。

平安時代末から近代まで「高島硯」は製作されてきたが、特に江戸時代を通じてその需要は高く、長門の赤間硯と同様に全国的なブランドとし



旧水戸彰考館跡出土硯  
(水戸市教育委員会蔵)

て定着していた。

そのことを象徴するかのように、全国あまたある硯製品の中で現在確認されている伝世資料や発掘調査での出土資料などを見ると、硯背に「赤間関」あるいは「高島硯」などブランド名とも言える地名が刻銘されている例として両者が多く見つかっている。



足利学校跡出土硯 (足利市教育委員会蔵)

続けて、足利学校跡出土の硯について、史跡足利学校跡では石硯、陶硯、石盤、石筆などの文房具が出土している。その内、九〇点余りが石硯であるが今のところ具体的な産地の特定までは至っていない。

注目される資料に硯の両側面に「宝永七寅年正月九日」、「観世音菩薩」の銘を刻む硯が見つかっている。時期が特定できる硯は少ないため貴重な資料である。



銘「宝永七寅年正月九日 □□」  
(足利市教育委員会蔵)

次に「旧閑谷学校」の関係資料であるが、閑谷学校は岡山藩主池田光政が寛文一〇（一六七〇）年に開設した日本最古の庶民のための公立学校で、江戸時代前期の建物と配置がほぼそのままの形で残る稀有な存在として著名である。国宝の講堂は備前焼の瓦で屋根が葺かれている。現在、この学校で使用していた江戸時代の硯については確認されていないため、今回の展示は備前焼で製作された硯や日本遺産の構成文化財となっている「熊沢蕃山宅跡」の関係資料として熊沢蕃山（一六一九・一六九一）が所用したと伝わる硯箱の展示をおこなった。

熊沢蕃山は江戸時代前期の儒学者で中江藤樹に師事した陽明学者として知られる。岡山藩主の池田光政に仕官したが、閑谷学校の創設に繋がる儒教思想について光政に影響を与えた人物の一人である。その後、明暦三（一六五七）年から四年間ほど蕃山は備前和気郡寺口村、後の蕃山村正楽寺の西隣に隠棲した。



伝熊沢蕃山所用硯箱（正楽寺蔵）



熊沢蕃山肖像 画：斎藤一興（正楽寺蔵）

資料の硯箱は蕃山所用として正楽寺に伝わるものである。この寺は真言宗の準別格本山で奈良時代の天平勝宝年間の創建とされ、域内には蕃山の父母や弟の泉仲愛の墓所などがある。

この硯箱には、硯や筆などはすでに存在しないが箱は内箱・外箱に分かれ、上面はいずれも漆仕上げに「三つ寄せ笠」の変形と思われる家紋が付

いている。蕃山の家紋は「笠」とされているが、これまでに本例と同じ家紋は確認されていない。

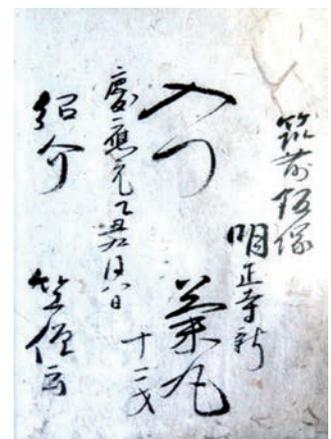
次に咸宜園跡出土の硯について紹介する。咸宜園跡ではこれまでの発掘調査で石硯や筆架（筆立て）などが見つかっている。中でも赤間硯の出土数が最も多い。文化一四（一八一七）年に創設された咸宜園には全国各地から門下生が来ているが、赤間硯の産地・長門国から一五六名が入門していることも無関係ではないかも知れない。

そのほか、咸宜園跡から出土した硯の一つに「明正寺」の銘を彫る資料がある。理由は不明であるがその文字は反転している。

咸宜園の入門簿によれば、明正寺に関しては慶応元（一八六五）年九月八日に筑前飯塚から入門した「菊丸」という人物がいる。入門簿には「明正寺新菊丸一二才」と記され、この人物が所用していた可能性がある。明正寺は浄土真宗の寺院



咸宜園跡出土硯 銘「明正寺」  
（日田市教育委員会蔵）



咸宜園入門簿 入門者「菊丸」  
（廣瀬資料館蔵）

で長崎街道に面していた。明正寺の過去帳によれば、享保一四（一七二九）年、幕府に献上されるための象がこの場所を通ったことが記してある。そのため、地元では「象の寺」と呼ばれている。また現在のところ菊丸の外には明正寺と称する寺院からの入門者は見当たらない。

また、もう一点の「□季松」と刻銘する硯について、「季松」または「季松」は門下生の名前の一部だと考えるが現在把握されている入門者の記録に該当する塾生はいない。



咸宜園跡出土硯 銘「□季松」  
（日田市教育委員会蔵）

水戸市



旧水戸彰考館跡

徳川光圀により開設された「大日本史」の編纂局。光圀に招かれた明の儒学者朱舜水是、水戸藩の修史事業に大きな影響を与えた。



旧弘道館（正庁）

総合大学ともいえる藩校の代表例。医学館では種痘が実施され、徳川斉昭は実子2人に種痘を行うなど、領内に普及を図った。現在でも館内では、論語教室が行われている。



旧弘道館



大日本史

水戸徳川家第2代藩主徳川光圀によって開始され、水戸藩の事業として継続し、明治時代に完成した歴史書。



日新塾跡

弘道館と同時期に水戸藩郊外で運営された私塾。水戸藩士を含む多彩な門人を輩出した。多様な教育科目を備え、医学も盛んであった。



常磐公園（偕楽園）

弘道館と一对の教育施設として造られた庭園。園内には、学問興隆の象徴として、「好文木」として知られる梅が植樹された。



足利学校跡（聖廟）

現存する日本最古の学校の遺跡。我が国儒学の学灯を伝える学問の府として全国より学徒が集った。自由で開放的な学びと自学自習の精神は、近世の学校の原点となった。なお、聖廟（孔子廟）は国内現存最古のものである。



足利学校跡（学校門）



足利学校跡

足利市



国宝漢籍『礼記正義』『尚書正義』『文選』『周易注疏』

漢籍を中心とした貴重な書籍の宝庫である足利学校は、近世期も全国から学者や著名人が訪れ、蔵書の閲覧や研究が行われた知のネットワークのセンターであった。



釋奠

聖廟では、孔子のまつりである釋奠が営まれる。伝統的な祭器を用い、現在は毎年11月23日に行われている。

備前市



**井田跡**

池田光政が中国周時代の土地制度である井田制を再現させた新田。一部は学田となり、閑谷学校の経営をささえた。



**旧閑谷学校**

岡山藩主池田光政が造った世界最古の庶民のための公立学校で、江戸時代前期の建物と配置がほぼそのままの形で残る稀有な文化遺産。



**備前国和気郡井田村延原文書**

検地帳などからは当時の学校領の様子が、入学願書や教科書等からは江戸時代の子もたちが学校に通う様子がわかる。



**熊沢蕃山宅跡**

池田光政は学校創立のきっかけとなる儒教思想を儒学者熊沢蕃山から学んだ。蕃山隠居の地が学校から程近いところに残る。



**釈菜**

江戸時代の学校には、儒学の祖孔子を祀る建物が造られることが多く、ここでは孔子の徳を称える釈菜の儀式が行われた。閑谷学校では、貞享3年(1686)から始まり、現在も行われている。



**咸宜園関係歴史資料**

私塾咸宜園の「入門簿」や「会計録」、和漢籍など、塾の実態を明らかにする資料が残る。



**廣瀬淡窓旧宅及び墓**

廣瀬淡窓の人間形成に大きな影響を与えた旧宅と咸宜園塾主らの墓(長生園)が現存する。



**咸宜園跡**

廣瀬淡窓が創設した近世日本最大規模の私塾跡。

日田市



**日田市豆田町重要伝統的建造物群保存地区**

私塾咸宜園と共生した町並みが残る。



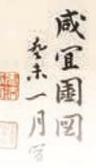
**桂林園跡(桂林荘公園)**

咸宜園の前身である私塾跡。それまで借家して講義を行っていた淡窓が初めて自らの塾舎を構えた場所で、塾生を励ます漢詩として全国的に著名な「休道の詩」(桂林荘雜詠示諸生)が詠まれた。



**長福寺本堂**

淡窓が最初に塾を開いた寺院の本堂が現存する。当時、出身僧侶が京都の高倉学寮の講師となるなど、日田における学問の中心であった。幼少時の淡窓はこの寺の僧侶に学び、その人間形成に影響を受けている。



1. 貝原益軒肖像

原画は狩野昌蓮

箱書きには大正一四年(乙丑)と記される。

縦一二二〇×横四一〇mm

作品は後世に模写されたもの。

貝原益軒は江戸時代、筑前国出身の儒者である。廣瀨淡窓の「儒林評」にはその人となりについて「益軒ハ博学ヲ以テ勝レタル人ナリ。」と説明している。



2. 廣瀨月化肖像

縦一一一〇×横四三〇mm

画は後藤方大、賛は廣瀨月化の生前の書 一八世紀  
月化は廣瀨淡窓の伯父で廣瀨家第四世のことである。九州俳壇の中心人物として活躍した。現在、咸宜園に現存する「秋風庵」は月化の建築によるもので、「秋風庵」はその俳号であった。幼少時代の淡窓を育て、文化的影響を与えたとされる。



3. 廣瀨秋子肖像

画は不詳 賛は小西重直 年代不詳

縦一一五〇×横三六〇mm

秋子は廣瀨家第五世桃秋の長女で、淡窓の妹である。名をアリ(安利)とした。病弱だった兄の淡窓を献身的に看病するなど淡窓とのエピソードは多い。二〇歳のとき、豪潮律師の計らいで京都の風早局に仕えた。病により二二歳で逝去した。



4. 廣瀨久兵衛肖像

画は不詳 賛は近衛忠熙 一九世紀後半

縦一四〇〇×横四三〇mm

久兵衛は廣瀨淡窓の弟で廣瀨家第五世桃秋の次男である。淡窓に代わって廣瀨家第六世を務めた。肖像は久兵衛八〇歳のお祝いとして作成されたもの。

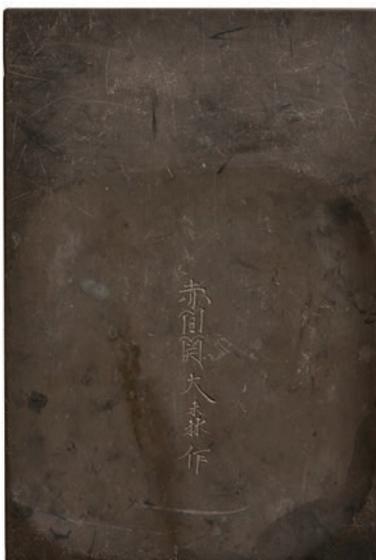


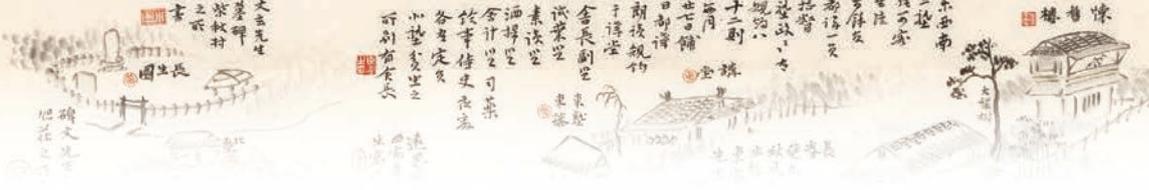
5. 伝廣瀨淡窓所用硯 長方硯

赤間硯 縦一八〇×横二二〇×高二二mm

銘「赤間関大森作」

硯首の上部に水滴を据える場所を持つ。硯の右側表面には険阻な山と鷹を陽刻する。





6. 伝廣瀬淡窓所用硯 変形長方硯

赤間硯 (門司硯カ)

縦二二六×横一〇〇×高二一mm

銘「豊前田野浦住 大神保名」判「保名」

江戸時代、赤間硯の硯石は豊前国の白野江や大積で産出された石材を使用していた時期があるが、製品は赤間関の対岸である田野浦の硯師大神氏の作である。墨堂の右側は筆置きとして使用したと思われる。硯首の片方と硯尾の両角を削り取るなど、従来の赤間硯には見られない造作であるが、淡窓の弟旭荘の遺愛品にも同様の作があり注目される。



7. 伝廣瀬淡窓所用硯 長方硯

赤間硯 縦一七七×横一一五×高二八mm

硯を左側に配置し、硯首上部には水滴、全体中央には墨、右側には筆置きを拵えた硯箱としての機能を備えた硯である。硯背側には四隅に造り付けの低い脚を設ける。梅と山を陽刻する。



8. 伝廣瀬淡窓所用硯

縦二二八×横一三〇×高三〇mm

天然硯で硯背に「鄭樵」と刻む箱書きには「鄭樵銘 淡窓愛玩硯」と墨書きがある。中国南宋時代の人で「通史」の撰者「鄭樵」なる人物がいるが関係性は不明である。昭和二三年に大分市で開催された「廣瀬淡窓先生及関係者遺芳展覧会」に出品された記録が残る。



出品資料図版・解説

9. 廣瀬旭荘所用硯 変形長方硯

赤間硯 縦二二六×横九〇×高二四mm  
 淡窓の末弟で漢詩人・儒学者として活躍した人物である。咸宜園で一時塾主を務めたが、後に堺で塾を開業した。その後も江戸や大坂に転居し、最後は摂津池田で没した。展示品は当初大坂天王寺の邦福寺に埋葬された副葬品の一つで、改葬した際に郷里日田に戻ってきたもの。硯は墨堂と墨池の右側に筆置きと思われる箇所を設ける。No.7の淡窓愛用の硯と寸法が近く、硯首や硯尾の加工が類似するなど、他に見られない特徴を共有する。側面に朱漆を塗る。副葬品には硯のほか、瑯石製の文鎮や磁器製の朱入れ、水晶印璽、メガネのレンズなどがある。



10. 廣瀬家所用硯 天然硯 (赤間石)

縦二一〇×横一四〇×高二〇mm  
 天然硯で裏面に「二元文元年」の銘がある。文人が愛用した木の葉型の天然硯は他にも多く見られる。墨池や硯縁部分は丁寧仕上げであり、硯背には斫り痕が残る。



11. 墨床 (右)

磁器 長六九×高一九mm  
 廣瀬家に伝わる水滴と墨床である。

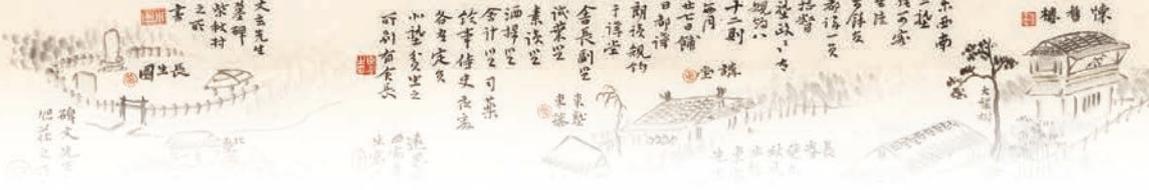
12. 水滴 (左)



13. 筆橋

銅製 長一五六×高七五mm  
 廣瀬家に伝わる筆橋である。農夫と水牛が橋を渡る様子を表現する。





14. 筆入

漆箱  
長一六九×奥行一〇九×高五二mm  
筆入れと伝わるが現在は墨が収まる。中には古梅園製で「日田郡教育会選定」の銘が入った墨もある。



15. 筆洗

径九四（玉洗のみ）×高八三（全体）mm  
玉製・木製  
廣瀨家に伝わる筆洗で本体は玉製、玉台は木製である。



16. 筆洗

磁器製 口径二二七×幅一三五×高一九〇mm  
廣瀨淡窓が所用したとされる筆洗である。



17. 硯屏

一九世紀 縦二一四×横一八二（最大）mm  
廣瀨家に伝わる硯屏である。硯の前方に立て、塵やほこりを防ぐ文房具である。画賛は日田出身の咸宜園門下生で「三絶僧」と呼ばれた平野五岳である。



出品資料図版・解説

18. 廣瀬久兵衛所用道具箱

長三七八×奥行九八×高一五四mm  
廣瀬久兵衛が所用した道具箱である。箱には赤間硯のほか、水滴や墨、そろばん等が残る。



19. 廣瀬家所用手箱

長二〇五×奥行七六×高一三〇mm  
廣瀬家が所用した手箱である。中には「赤間関」の銘が刻まれた赤間硯が収まる。



20. 廣瀬敬四郎家所用硯 長方硯

縦一六六×横一三四×高三九mm  
廣瀬敬四郎は旭荘の四男である。敬四郎家には硯や墨など多くの文房具が伝わるが、その中には旭荘のものが含まれているとされる。



21. 廣瀬敬四郎家所用硯

天然硯(赤間硯)  
縦一二〇×横九三×高一三mm  
木の葉型の硯で木蓋が付属する。



木蓋装着時



22・廣瀬敬四郎所用硯 長方硯

龍領硯 縦一六三×横一一一×高五二mm  
銘「龍領石」

龍領石は肥後熊本産の硯石である。明治時代に熊本で勤務したことのある敬四郎の所用と思われる。



23・田能村竹田所用硯「天然石硯」

天然硯 縦一六〇×横一九五×高三五mm  
田能村竹田所用の硯と伝わる。竹田はこの硯を「天然石研」と呼称し、その姿を写した作品を残している。「研」は硯の古称とされる。

田能村竹田所用の硯と伝わる。竹田はこの硯を「天然石研」と呼称し、その姿を写した作品を残している。「研」は硯の古称とされる。



24・天然石研図巻

田能村竹田が自ら所有する硯を描いたもの。そのほか、同巻には竹田の子如仙が書いた石研の記録も収まる。



田能村如仙の書



田能村竹田の書



出品資料図版・解説

25. 恒遠醒窓所用硯

① 大型長方硯 粘板岩

縦二九五×横一九四×高三〇mm

銘「石松」（硯背の左下部）

平戸藩で講義した際に藩主より拝領したと伝わる。  
（豊前市指定文化財）



② 天然硯 紫金石

赤間硯 縦一〇八×横八九×高一八mm

硯背に「紫」「金」「石」の銘がある。また硯背にある  
研り痕は墨を擦る際に硯の安定性を保つための加工である。



③ 天然硯 石材不明

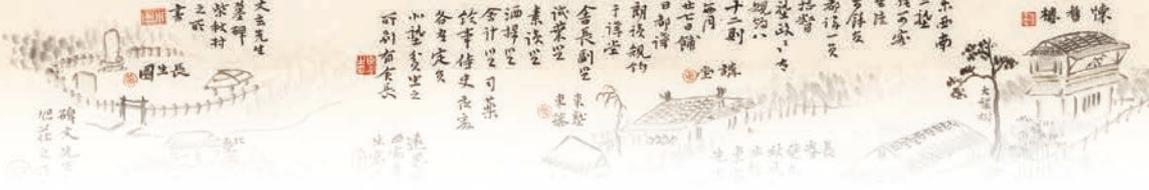
縦一七〇×横二〇八×高二八mm

26. 大村益次郎所用硯屏

縦一四〇×横五〇×高八〇（台座含む）mm

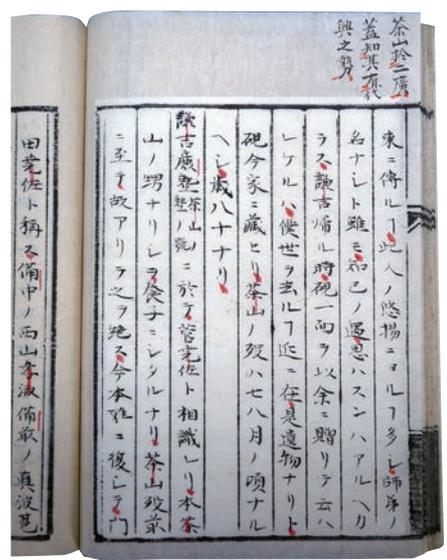
硯屏は石製で台は木製で拵えている。咸宜園門下生の  
大村益次郎が使用した硯屏である。硯の前方に立  
てる文房具で、塵やほこりなどを防ぐ小さな衝立で  
ある。大村は長州藩出身の医家で幕末維新期には兵  
学者として活躍した。





27. 懐旧楼筆記

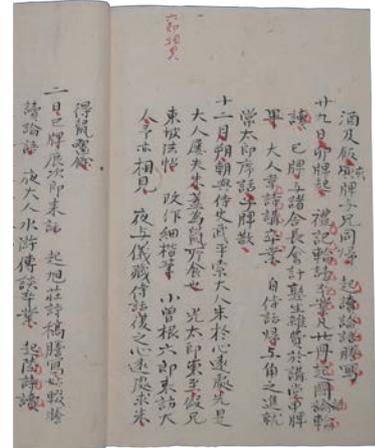
懐旧楼筆記は廣瀨淡窓の晩年に作成した自叙伝である。展示は文政一〇（一八二七）年九月の条で、江戸時代後期の漢詩人菅茶山のもとを訪問した淡窓の弟旭莊を介して淡窓に硯が贈られたことを記したものの。両者は面会する機会こそなかったが淡窓は漢詩の指導を度々書簡で請うており、二〇年来の交流があったと淡窓も記録する。茶山も淡窓の詩才を認めていた。記事にある茶山の贈った硯が現在の廣瀨家に伝わる硯に含まれているかは不明である。



28. 林外日記

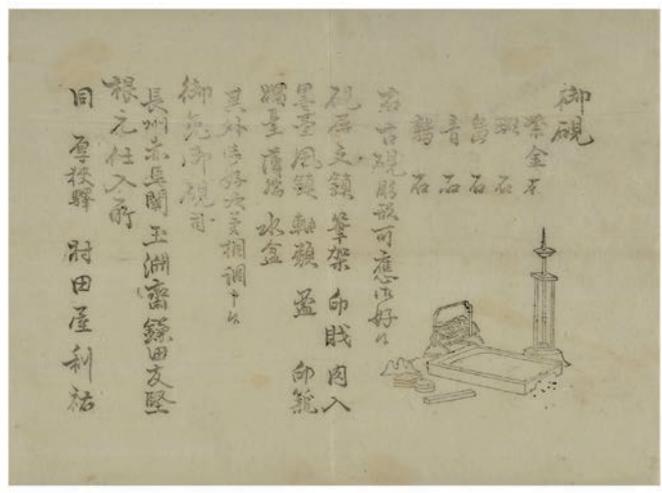
林外は淡窓の弟旭莊の長子であるが後に淡窓の養子となり、幕末から明治初期にかけて咸宜園を経営した。右は嘉永五（一八五二）年一月二二日の条で、咸宜園内で朱墨を製造していたと考えられる記事である。淡窓側の日記にはその事実は見えない。当時

は江戸や堺に朱座が設けられており、一般に朱を作るとは禁じられていたとされる。また、左は嘉永六年一二月朔日の条で、淡窓が咸宜園内の心遠処招隠洞と呼ばれる居宅で朱を失い、それを林外と侍史の武平がこれを探しているという記事である。



29. 引札

長州厚狭駅村田屋利祐赤間関硯広告（塩田家文書）縦二〇〇×横二七〇mm  
赤間硯を中心に筆・紙以外の文房具が書き上げられた広告チラシである。硯司の鎌田友堅や荒石（原石）を供給する根元任人所の村田屋利祐などの名が見える貴重な史料である。萩藩士で郡奉行所本締役や代官を務めた塩田家の史料で、当該史料には年紀は見あたらないが、塩田家文書群のうち「壬午（文政五年）内簡入り」（総計八一点）の中に含まれる。





30. 毛利輝元所用硯 隅丸長方硯

赤間硯 一六世紀末～一七世紀初

縦一五六×横八一×高一五mm

銘「天下一 赤間関住 大森土佐守」判「頼激」

毛利輝元（一五五三～一六二五）が晩年使用したとされる。硯は硯面、硯背ともに精緻な造りで気品に溢れ、硯面一帯に広がる石紋が美しい。硯箱には水滴や筆なども併せて収納されている。硯は「毛利輝元関係資料」（山口県指定文化財）の一部である。



31. 八角硯

赤間硯 一六世紀末～一七世紀初

縦一〇九×横一一〇×高一四mm

銘「天下一 赤間関住 大森土佐守」判「頼激」



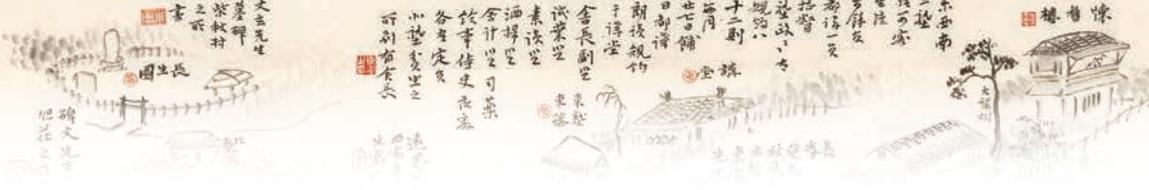
32. 大型風字硯

赤間硯 一七世紀前半～後葉

縦二八六mm×横一三八mm×高さ不明

銘「天下一 赤間関住 大森土佐守」判「頼激」  
現在は木製の硯台があり、銘は確認できない。





33. 隅丸長方硯

赤間硯 青石 一八世紀前半〜後葉  
 縦一〇九×横七八×高一五mm  
 銘「赤間関住 大森土佐守」判「頼激」



34. 長方硯

赤間硯 青石 一八世紀前半  
 縦一七五×横七八×高一五mm  
 銘「赤間関住 大森土佐守」判「頼激」  
 硯首上面に陽刻あり。



35. 大型円面硯

赤間硯 紫石 一八世紀前半  
 径二四五×高三五mm  
 銘「赤間関住 大森土佐守」判「頼激」



36. 長方硯

赤間硯（天然硯） 明治時代頃  
縦二〇二×横一〇八×高二四（裝飾含まない）mm  
銘「赤間硯 龍泉作」  
硯首上面に裝飾あり。



37. 円面硯

赤間硯（天然硯） 大正時代から昭和初期頃  
径一一四×高二五mm  
側面はタタキ仕上げ



38. 面取方硯

赤間硯 現代作品 日枝玉峯作  
縦一六七×横二三六×高四一mm  
第六一回日本伝統工芸品展（平成二六年）入選作品



39. 織月硯

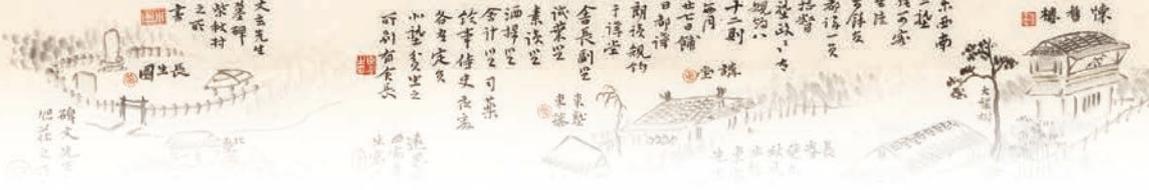
赤間硯 現代作品 日枝陽一作  
縦二一八×横一六四×高四七mm  
第三八回山口伝統工芸品展（平成二七年）受賞作品



40. 赤間硯制作工程一式

左上の原石から右下に向かって加工段階とし、左下は完成品である。完成品は現代の作品で玉峯堂の作（縦一五〇×横一二〇×高二三mm）である。





41. 萩城跡(外堀地区) 出土硯 円面硯  
赤間硯 径一一五×高一八mm  
銘「赤間関住 大森土佐守」 判「頼激」



42. 萩城跡(外堀地区) 出土硯 長方硯  
赤間硯 縦一四七(残)×横六〇×高一八mm  
銘「赤間関住」



43. 萩城跡(外堀地区) 出土硯 長方硯  
赤間硯 縦一五五×横四九(残)×高一四mm  
裝飾あり。硯首部分に桃を陽刻する。



44. 萩城跡(外堀地区) 出土硯 長方硯  
高田硯カ(真岩)  
縦一一九×横五六×高一mm  
墨堂中央が激しく磨耗していることから、玉砥石に  
転用したと考えられる。



45. 萩城跡(外堀地区) 出土硯 長方硯  
赤間硯 縦一五二×横七五×高二四mm  
銘「赤間関定之作」





出品資料図版・解説

46. 府内城・城下町跡出土硯

① 長方硯 赤間硯 縦二三四×横五一×高一六mm  
銘「赤間関住」



② 長方硯 赤間硯 一八世紀前半  
縦一九八×横七六×高二五mm

府内城下で起こった火災住居に伴う火災処理土坑から出土した資料でNo.47の水滴も同じである。硯背には所有者の住所と名前があり、両側面には購入時期が刻まれる。赤間硯に多用される硯背の覆手は確認できない。府内藩日記によれば享保一九（一七三四）年一月一四日に堀川町で出火した記録があり、その可能性が高いとされる。



銘「享保十三年」



銘「堀川町長屋  
安部時信（花押）」



銘「正月吉日 辰之□」



47. 府内城・城下町跡出土水滴

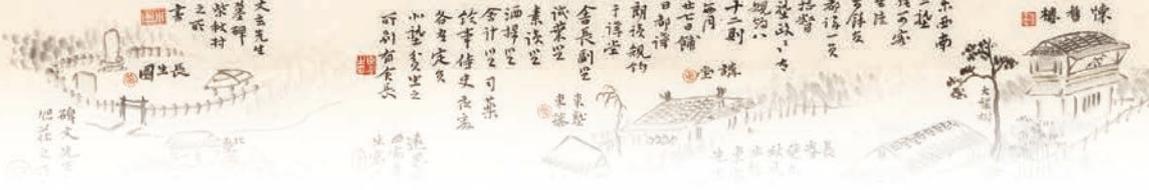
磁器製（肥前産） 長一〇一×奥行六四×高六六mm  
染付 表面に獅子と牡丹を施している。



48. 咸宜園跡出土硯① 長方硯

赤間硯 一九世紀 縦二六二×横七二×高二三mm  
銘「□間関」





49. 咸宜園跡出土硯② 長方硯  
赤間硯 一九世紀 縦一八〇×横六五×高三mm  
銘「□□閣 請合」



50. 【日本遺産記念展示品】  
旧水戸彰考館跡出土硯（水戸城跡18次調査）

① 長方硯 高島硯 一九世紀  
縦一五二×横六〇×二〇mm  
銘は五行あり。  
右「大極上本高島硯」銘の上からさらに「申□」  
右中「大極上本高島硯」  
中「吟味方」  
左中「文政八西四月一九日□□」  
左「中（以下欠損）」



② 長方硯  
高島硯 一九世紀  
縦一六七×横六一×高二〇（残）mm  
銘「極上高嶋石」



出品資料図版・解説

51. 足利学校跡出土硯

史跡足利学校跡では近世から明治期までに使用された硯が計九三点出土している。多くは石製品であるが陶製のものも含まれる。その内、次の五点を紹介する。なお、寸法や材質などの記述は報告書（足利市教育委員会一九九二）の記載に拠った。

① 長方硯 一八世紀初頭

縦一二四×横六二×高二四mm

流紋岩質あるいはデイサイト質凝灰岩

左側面に「宝永七寅年正月九日 □□」、右側面には「観世音菩薩」の刻銘あり。硯面と硯背ともに朱墨の痕跡が残る。



② 長方硯

縦一六七×横七五×高二四mm

頁岩（粘板岩）

墨堂中央に小穴があり、その両側には横方向の線刻が縦に連続して走る。また硯背に浅く長方形の覆手があり、文字と絵が線刻されるが不詳である。



③ 長方硯

縦一五七×横六四×高二四mm

デイサイト質凝灰岩

墨堂の中央が深く摩耗している。全面墨痕あり。硯面朱墨痕あり。硯背に線刻あるが不詳。





④ 小型長方硯  
 縦五七×横三三×高一二mm  
 頁岩（粘板岩）



硯面は墨池と墨堂を意識した造りを見ることができ  
 る。硯背は平底であるが篆書一文字を刻み、その下  
 には判と思われる一重の線刻とその内側に文字を見  
 るが不詳である。また側面にも線刻あるが判然とし  
 ない。

⑤ 長方硯  
 縦一三〇（残）×横四八×高一九mm  
 デイサイト質凝灰岩  
 墨堂全体が摩耗している。



52. 伝熊沢蕃山所用硯箱



外箱



内箱の蓋裏

外箱 縦四〇六×横三三〇×高一四四mm  
 内箱 縦二四二×横二二二×高四五mm  
 熊沢蕃山ゆかりの正樂寺に伝わる硯箱である。硯や  
 筆などは残っていない。



出品資料図版・解説

53. 硯（備前焼製）

縦七一×横四八×高一八mm  
伊部南大窯跡出土の備前焼製硯である。  
硯背に「干」のへら描がある。



54. 咸宜園跡出土硯③ 長方硯  
赤間硯 一九世紀

縦一二七（残）×横五四×高一六mm  
銘「赤間関」



55. 咸宜園跡出土硯④ 円面硯  
赤間硯 一九世紀

径九三×高一四（残）mm  
銘「赤間関」





56・咸宜園跡出土筆架  
赤間石 一九世紀  
長二二×高二四×奥行七mm



57・咸宜園跡出土硯⑤ 長方硯  
石材不明 一九世紀  
縦一四五(残)×横七八×高二八mm  
銘「明正寺」「下」

明正寺に関して、咸宜園門下生には慶応元年九月八日に筑前飯塚から入門した「菊丸」という人物がいる。咸宜園入門簿には、「明正寺新菊丸一二才」と記され、この人物の所蔵であった可能性がある。また菊丸以外には明正寺出身の門下生は他にいない。



58・咸宜園跡出土硯⑥ 長方硯  
高島硯カ(粘板岩) 一九世紀  
縦九四(残)×横七六×高一三mm  
使用不能となった硯の裏面を再利用するために加工途中の硯である。

使用不能となった硯の裏面を再利用するために加工途中の硯である。



出品資料図版・解説

59 咸宜園跡出土硯⑦ 長方硯

石材不明 一九世紀

縦九二(残)×横七五×高二三mm

銘「李松カ」

李松は門下生の名前の可能性があるが現在のところ  
入門者の記録にその名は見当たらない。





平成27年度咸宜園教育研究センター秋季企画展 出品資料一覧

No.	展示資料名	点数	所蔵先	備考 ※赤間硯と表記あるものはすべて石材は頁岩
1	貝原益軒肖像	1	福岡大学高橋研究室	原画:狩野昌運 縦1220×横410mm 作品は模写
2	廣瀬月化肖像	1	(公財)廣瀬資料館	画:後藤方大 賛:廣瀬月化(生前の書) 縦1110×横430mm 硯箱・硯・筆等を描く 18世紀
3	廣瀬秋子肖像	1	(公財)廣瀬資料館	画:不詳 賛:小西重直 縦1150×横360mm 硯箱・筆・硯を描く
4	廣瀬久兵衛肖像	1	(公財)廣瀬資料館	画:不詳 賛:近衛忠熙 縦1400×横430mm 太史硯を描く
5	伝廣瀬淡窓所用品	1	(公財)廣瀬資料館	長方硯 赤間硯 縦180×横120×高21mm 銘「赤間関大森作」 裝飾有
6	伝廣瀬淡窓所用硯	1	(公財)廣瀬資料館	変形長方硯 赤間硯(門司硯か) 縦126×横100×高21mm 銘「豊前田野浦住 大神保名」 判「保名」
7	伝廣瀬淡窓所用硯	1	(公財)廣瀬資料館	長方硯 赤間硯 縦177×横115×高28mm 裝飾有
8	伝廣瀬淡窓所用硯	1	個人	天然硯 赤間硯 縦228×横130×高30mm 銘「鄭樵」
9	廣瀬旭荘所用硯	1	(公財)廣瀬資料館	変形長方硯 縦126×横90×高24mm 副葬品
10	廣瀬家所用硯	1	(公財)廣瀬資料館	天然硯(赤間石) 縦210×横140×高20mm 銘「元文元年」 裝飾有
11	墨床	1	(公財)廣瀬資料館	磁器 長69×高19mm
12	水滴	1	(公財)廣瀬資料館	磁器 高78×幅65mm
13	筆橋	1	(公財)廣瀬資料館	銅製品 長156×高75mm 農夫と水牛が付く
14	筆入「廣瀬家所用品」	1	(公財)廣瀬資料館	漆箱 筆入と伝わるが中身は墨が収まる
15	筆洗「廣瀬家所用品」	1	(公財)廣瀬資料館	玉製・台座は木製 径94(玉洗のみ)×高83mm
16	筆洗「廣瀬淡窓所用品」	1	(公財)廣瀬資料館	磁器製 口径127×幅135×高190mm
17	硯屏	1	(公財)廣瀬資料館	木製 高214×幅182(最大) 画賛:平野五岳
18	廣瀬久兵衛所用道具箱	1	(公財)廣瀬資料館	木製 長378×奥行98×高154mm 赤間硯・水滴・墨などが収まる
19	廣瀬家所用手箱	1	(公財)廣瀬資料館	木製 長205×奥行76×高130mm 赤間硯が納まる。 銘「赤間関」
20	廣瀬敬四郎所用硯	1	個人(寄託品)	長方硯 縦166×横134×高さ39mm 裝飾有
21	廣瀬敬四郎所用硯	1	個人(寄託品)	天然硯 赤間硯 縦120×横93×高13mm 木製蓋(不定形)が付く
22	廣瀬敬四郎所用硯	1	個人(寄託品)	長方硯 肥後龍領石 縦163×横111×高51mm 銘「龍領石」
23	田能村竹田所用硯「天然石研」	1	竹田市立歴史資料館	天然硯 縦160×横195×高35mm
24	天然石研図巻	1	竹田市立歴史資料館	卷子 田能村竹田が所用した「天然石研」の書画や竹田の子、如仙の書
25	恒遠醒窓所用硯	3	個人	1. 大型長方硯 縦295×横194×高30mm 銘「□石松」 2. 天然硯 赤間紫金石 縦108×横89×高18mm 銘「紫」「金」「石」 3. 天然硯 縦170×横108×高28mm 以上、豊前市指定文化財
26	大村益次郎所用硯屏	1	山口市歴史民俗資料館	石製・木製台座 縦140×横50×高80(台座含む)mm
27	懐旧楼筆記	1	(公財)廣瀬資料館	廣瀬淡窓の自叙伝 菅茶山愛用の硯を淡窓に贈ったとされる記事
28	林外日記	2	(公財)廣瀬資料館	廣瀬林外の日記 墨に関する記事
29	引札	1	山口県文書館	長州厚狭駅村田屋利祐 赤間関硯広告(塩田家文書) 木版刷
30	毛利輝元所用硯	1	毛利博物館	隅丸長方硯 赤間硯 縦156×横81×高15mm 16世紀末～17世紀初 銘「天下一 赤間関住 大森土佐守」 判「頼激」 山口県指定有形文化財「毛利輝元関係資料」の一部
31	八角硯	1	下関市立長府博物館	赤間硯 縦109×横110×高14mm 16世紀末～17世紀初 銘「天下一 赤間関住 大森土佐守」 判「頼激」
32	大型風字硯	1	下関市立長府博物館(寄託品)	赤間硯 縦286×横138mm×高さ不明 17世紀前半～後葉 銘「天下一 赤間関住 大森土佐守」 判「頼激」 木製台座付
33	隅丸長方硯	1	下関市立長府博物館	赤間硯 青石 縦109×横78×高15mm 17世紀後葉～18世紀初 銘「赤間関住 大森土佐守」 判「頼激」
34	長方硯	1	下関市立長府博物館	赤間硯 青石 縦109×横78×高15mm 18世紀前半 銘「赤間関住 大森土佐守」 判「頼激」 裝飾有
35	大型円面硯	1	下関市立長府博物館(寄託品)	赤間硯 径245×高35mm 18世紀前半 銘「赤間関住 大森土佐守」 判「頼激」 裝飾有
36	長方硯	1	個人	赤間硯(天然硯) 縦202×横108×高24mm 明治時代頃 銘「赤間硯 龍泉作」 裝飾有





平成 27 年度咸宜園教育研究センター秋季企画展 出品資料一覧

37	円面硯	1	個人	赤間硯(天然硯) 径114×高25mm 大正時代から昭和初期頃
38	面取方硯	1	日枝玉峯氏	赤間硯 日枝玉峯作 縦167×横236×高41mm
39	織月硯	1	日枝陽一氏	赤間硯 日枝陽一作 縦218×横164×高47mm
40	赤間硯制作工程一式	5	日枝玉峯氏	現代 原石から加工段階・完成品 完成品は赤間硯 玉峯堂作 縦150×横120×高23mm
41	萩城跡(外堀地区)出土硯	1	山口県埋蔵文化財センター	外堀地区Ⅲ 円面硯 赤間硯 径115×高18mm 銘「赤間関住 大森土佐守」判「頼激」
42	萩城跡(外堀地区)出土硯	1	山口県埋蔵文化財センター	外堀地区Ⅰ 長方硯 赤間硯 縦147(残)×横60×高18mm 銘「赤間関住」
43	萩城跡(外堀地区)出土硯	1	山口県埋蔵文化財センター	外堀地区Ⅲ 長方硯 赤間硯 縦155×横49(残)×高14mm 裝飾有
44	萩城跡(外堀地区)出土硯	1	山口県埋蔵文化財センター	外堀地区Ⅲ 長方硯 高田石カ(頁岩) 縦119×横56×高11mm
45	萩城跡(外堀地区)出土硯	1	山口県埋蔵文化財センター	外堀地区Ⅰ 長方硯 赤間硯 縦152×横75×高24mm 銘「赤間関定之作」
46	府内城・城下町跡出土硯	2	大分市埋蔵文化財保存活用センター	1. 長方硯 赤間硯 縦134×横51×高16mm 銘「赤間関住」 2. 長方硯 赤間硯 縦198×横76×高25mm 銘「堀川町長屋 安部時信(花押)」 「享保十三年」「正月吉日 辰之口」 火災により全体が被熱している。
47	府内城・城下町跡出土水滴	1	大分市埋蔵文化財保存活用センター	磁器(肥前産) 染付 長101×奥行64×高66mm 表面に獅子と牡丹を裝飾
48	咸宜園跡出土硯①	1	日田市教育委員会	長方硯 赤間硯 19世紀 縦162×横72×高22mm 銘「□間関」
49	咸宜園跡出土硯②	1	日田市教育委員会	日田市教育委員会
50	旧水戸彰考館跡出土硯(水戸城跡18次調査)	2	水戸市教育委員会	1. 長方硯 高島硯 19世紀 縦152×横65×高22mm 銘「大極上本高島硯」 「文政八西四月一九日□□」など 2. 長方硯 高島硯 19世紀 縦167×横61×高20(残)mm 銘「極上高島石」
51	足利学校跡出土硯	5	足利市教育委員会	1. 長方硯 18世紀初頭 縦124×横62×高24mm 銘「宝永七寅年正月九日 □□」(左側面)、「観世音菩薩」(右側面) 2. 長方硯 縦167×横75×高24mm 硯背に文字と絵が線刻されるが不詳 3. 長方硯 縦157×横64×高24mm 硯背に線刻あるが不詳 4. 小型長方硯 縦57×横33×高11mm 平底の硯背に篆書1文字を刻み、その下部に判と思われる一重の線刻とその内側に文字を見るが不詳。 5. 長方硯 縦130(残)×横48×高19mm
52	伝熊沢蕃山所用硯箱	1	正楽寺(備前市)	漆箱 外箱:縦406×横320×高144mm 内箱:縦242×横212×高45mm 家紋有
53	硯	1	備前市教育委員会	備前焼製硯 縦71×横48×高18mm 硯背にヘラ描がある
54	咸宜園跡出土硯③	1	日田市教育委員会	長方硯 赤間硯 19世紀 縦127(残)×横54×高16mm 銘「赤間関」
55	咸宜園跡出土硯④	1	日田市教育委員会	円面硯 赤間硯 19世紀 径93×高14mm 銘「赤間関」
56	咸宜園跡出土筆架	1	日田市教育委員会	赤間石 19世紀 長22×高24×奥行7mm 赤間石を加工した筆立て
57	咸宜園跡出土硯⑤	1	日田市教育委員会	長方硯 19世紀 縦145(残)×横78×高28mm 銘「明正寺」「下」
58	咸宜園跡出土硯⑥	1	日田市教育委員会	長方硯 高嶋硯カ 19世紀 縦94(残)×横76×高13mm 硯背に再加工の痕跡があり墨堂と墨池を作る
59	咸宜園跡出土硯⑦	1	日田市教育委員会	長方硯 19世紀 縦92(残)×横75×高23mm 銘「□李松」
		72		



参考文献

神宮司庁『古事類苑 文学部三』一九〇一（吉川弘文館一九九七）  
 重山禎介『下関二千年史 全』一九一五  
 竹内若校訂『毛吹草』一九四三（榎岩波文庫）  
 吉永禹山編 門司郷土叢書『門司硯』一九五三 門司郷土会（『門司郷土叢書 第六巻』  
 国書刊行会一九八二）  
 中山主膳編 門司郷土叢書『田野浦村志下』一九五八 門司市教育委員会（『門司郷土  
 叢書 第二巻』国書刊行会一九八一）  
 山口県文書館編『防長風土注進案 第一六巻 吉田宰判』一九六一  
 寺島良安『和漢三才図会』一九七〇（榎東京美術）  
 下関市史編集委員会『下関市史 藩制・明治前期』一九七三  
 村井康彦『江戸時代図誌』二〇巻 一九七六 山陽道  
 宇野雪村『文房古玩事典』一九八〇 柏書房  
 堀尾卓司『赤間関硯』『郷土』第二七集 一九八一  
 堀尾卓司『赤間関硯』『郷土』第二八集 一九八二  
 田村哲夫・榎本徹『赤間硯』『山口県百科事典』一九八二 山口県教育会編（大和書房）  
 秋市史編纂委員会編『秋市史 第一巻』一九八三  
 下関市史編集委員会『下関市史 市制施行・終戦』一九八三  
 山陽町教育委員会『山陽町史』一九八三  
 堀尾昇平『赤間関硯 一、赤間関硯の歴史』『山口短期大学研究紀要五』一九八三  
 藤本正次編『硯の辞典』一九八四 秋山書房  
 水野和雄『日本石硯考 出土古品を中心として』『考古学雑誌』第七〇巻第四号一九八五  
 石川松太郎『寺子屋』『国史大辞典』国史大辞典編集委員会編 一九八八 吉川弘文館  
 足利市教育委員会『史跡足利学校跡保存整備報告書―経過・発掘調査編―』一九九二  
 宇野雪村『文房古玩事典普及版』一九九三 柏美術出版  
 福岡市教育委員会『博多四一』一九九四  
 垣内光次郎『江州高嶋硯の生産』『江戸時代の生産遺跡』一九九四 江戸遺跡研究会  
 大分県教育委員会『府内城三ノ丸北口跡』一九九六  
 山口県編『山口県史 資料編 中世一』一九九六

廣瀬尚美『廣瀬資料館図録』一九九九 源流社  
 垣内光次郎『石や木の加工』『図解・日本の中世遺跡』二〇〇一（財）東京大学出版会  
 小松大秀『日本の美術 第四二四号 文房具』二〇〇一 至文堂  
 汐見一夫『石製品の流通・砥石と硯の流通』『図解・日本の中世遺跡』二〇〇一（財）  
 東京大学出版会  
 （財）山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター『萩城跡（外堀地区）Ⅰ』二〇〇二  
 日枝陽一『赤間硯の造形―造形及びその歴史と素材特性の調査研究―』博士（学術）学  
 位論文二〇〇二  
 大分市教育委員会『府内城・城下町跡―第一五次調査報告書―』二〇〇四  
 岩崎仁志『近世赤間硯の銘について』『山口考古』第二五号 二〇〇五 山口考古学会  
 原田倫子『近世・近代遺跡出土の赤間銘のある硯について』『考古論集』川越哲志先生  
 退官記念論文集 二〇〇五  
 日田市教育委員会『史跡咸宜園跡秋風庵他保存修復工事報告書―発掘調査編―』二〇〇五  
 （財）山口県ひとつくり財団 山口県埋蔵文化財センター『萩城跡（外堀地区）Ⅲ』  
 二〇〇六  
 岩崎仁志『考古学からみた赤間硯―近世の在銘資料を中心に―』『地域文化研究』（梅光  
 学院大学地域文化研究所紀要）第二二集 二〇〇六・三  
 岩崎仁志『大森家製作の赤間硯―伝世資料の紹介―』『山口県文化財』三七  
 二〇〇六・八 山口県文化財愛護協会  
 佐中忠司『伝統的工芸品産業の事例調査―毛筆製造業に関する全国的概況―』『比治山大  
 学現代文化学部紀要第一四号』二〇〇七  
 備前市教育委員会『国指定史跡伊部南大窯跡発掘調査報告書』二〇〇八  
 日本文具資料館『日本文具資料館コレクションからみる文具・人・文化』二〇〇九  
 岡野将士 資料紹介『文恭先生喪儀』『広島県立歴史博物館研究紀要』第二号 二〇一〇  
 日田市教育委員会『廣瀬淡窓の生家―廣瀬家の歴史と業績―』二〇一一  
 日田市教育庁咸宜園教育研究センター『平成二五年度咸宜園教育研究センター特別展（秋  
 季企画展）『九州の私塾と教育―咸宜園とその周辺―』展示解説書 二〇一三  
 吉積久年『資料紹介』『山口県文書館研究紀要』第四〇号 二〇一三  
 岩崎仁志『赤間硯に関する覚書』『山口考古』第三四号 二〇一四 山口考古学会

平成二七年度 咸宜園教育研究センター秋季企画展  
「文人の至宝く学芸と硯の世界く」

発行日 平成二七年一〇月一〇日

編集・発行 日田市教育庁 咸宜園教育研究センター  
八七七・〇〇一二

大分県日田市淡窓二・二・一八

電話 〇九七三・二三一・〇二六八番

印刷・製本 尾花印刷有限公司



遠恩樓

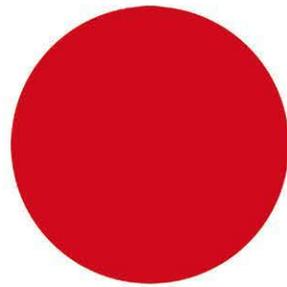
心遠樓

和甫堂

立雪齋

講堂

東塾



JAPAN HERITAGE

日本遺産

咸宜園教育研究センター